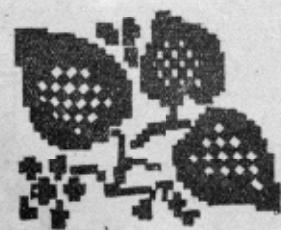




模範裁縫綴教科書

大妻コタクカ著

巻一



株式会社

三省堂

375.95
089
4B



板 榻 烏 原 模 標 此 榻 江 戸 製 標



大妻學院
校圖書
三〇六



3465

はしがき

- 一、本書は、高等女學校教授要目に準據し、高等女學校及びこれと同程度の各種學校の裁縫科の教科用書に充てたいために編纂したものであります。
- 二、本書は、實際教授上の便宜から、文部省教授要目の順序を變更し、且つ要目に掲げられてゐないものでも實際必要なものは之を附加しました。
- 三、本書は、四箇年又は五箇年の高等女學校のいづれにも適切な教科書とするために全體を五卷に分け、第一卷から第四卷までは和服、第五卷を洋服として、各學年の配當は次のやうに致しました。
四箇年程度の學校では、第一學年には第一卷、第二學年には第二卷、第三學年には第三卷、第四學年には第四卷と第五卷とを併用させます。

又五箇年程度の學校では第一卷から第三卷までは、前者と同様に扱ひ第四卷と第五卷とは第四・五學年を通じて併用させます。

本書は、多年の經驗と研究とを基として、種々の方法の中から最も一般的と思はれるものを採用し、徒に理論に走らず、流儀に囚れない三やうにいたしました。正統學の高學大學生の心地を考慮して、寸法については適宜にこれを取捨し、學習者の實習と記憶とに便利になやうにいたしました。

大正十五年十二月

著者しるす

模範裁縫教科書 卷四

目次

第一章	男 桶	一
第二章	男物單衣羽織	一
第三章	薄物單衣	一
第四章	丸帶	一
第五章	男帶	一
第六章	小袖模様及び絞について	一
第七章	小袖拾重ね	一
第八章	比翼	一
第九章	單衣重ね	一
第十章	拾半コート	一
第十一章	夜具類	一
第十二章	大巾中巾物各種裁ち方	一

授　　授　　要　　目		注意　～　の中の字は番号を示したものであります
第一　學　年	第二　學　年	
基礎的技術……(一)	一つ身縫入……(二)	本裁男物單衣……(一)
襦　　袴……(一)	本裁女物拾……(二)	本裁男物單衣……(二)
本裁女物單衣……(二)	寝冷え知らず……(二)	寝冷え知らず……(二)
		複合帶……(三)
		蓮物單衣……(四)
		男物單衣羽織……(四)
		男物單衣重ね……(四)
		單衣重ね……(四)
		男兒シヤツ
		ズボン下……(五)
本裁男物拾……(一)	綿布毛織の 綿方毛織の……(三)	子供洋服につく 子供服す法……(五)
四つ身單衣……(一)	本裁女物綿入……(三)	子供服下着類……(五)
女　　袴……(一)	本裁男物拾羽織……(三)	子供服下着類……(五)
四つ身拾……(一)	中小裁羽絨被布 の裏方……(三)	男兒服……(五)
	ミシン使用法……(三)	小學生服……(五)
	婦人シャツ……(三)	女學生服……(五)
一つ身袖無羽織……(一)	小袖・模様紋に ついて……(四)	男學生服……(五)
下穿……(一)	小袖拾重ね……(四)	ケープ……(五)
子供脛……(一)	女兒外衣……(五)	夜具類(表附)……(四)
綿掛と子供前掛……(三)	大巾物裁方(表附)……(四)	
刺烹前掛……(三)		
男兒服……(五)		

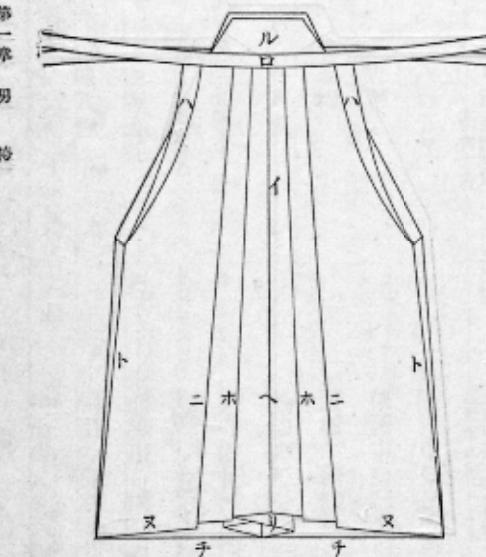
模範裁縫教科書 卷四

第一章 男　袴

この二種類ある
大きな風呂敷である

男袴各部の名稱

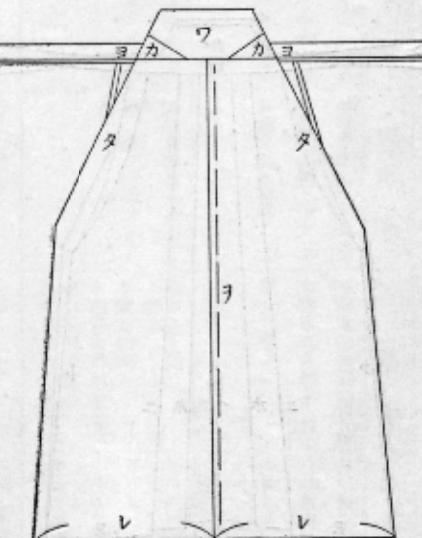
前



第一章 男　袴

ルヌリテトヘホニハロイ
裏前切相三二一笠前紐
脇巾上り廻のののののの
腰巾上り引襞襞襞襞紐下

男持各部の名稱



レ タ ヨ カ ワ オ ル
後 投 附 腰 後
市 切 紐 菱 板 襷

相 紐 下 引

普通仕立上げ寸法と寸法の割り出し方

着丈の十分の六に四粋加へる

八七粋

紐下の三分の二に二粋加へる

六〇粋

後 巾

三〇粋

着物の後巾に同じ
後巾の四分の三に二粋加へる

後 腰 巾

二四粋五耗

後巾の十分の一
後巾の二十分の一

後 重ね 裳

一六粋三耗

後巾の六分の四
後腰巾に同じ

腰 板 巾

二四粋五耗

腰板巾の三分の一に四耗加へる
後腰巾の三分の一に八粋位加へる

附 菱 の 巾

九粋

腰板の斜線の二分の一に八耗加へる
後巾と同寸か又は二粋廣く

附 菱 の 高 さ

五粋

上後巾の五分の一より四耗狭く

前 脇 巾

一八粋

前脇巾の四分の一
相引の高さより凡そ六粋を減ず

乘 間

四八粋

後巾に凡そ六粋加へる

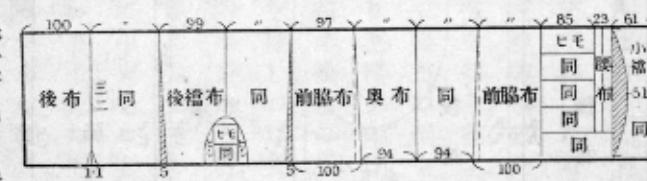
襷 の 高 さ

三六粋

四粋五耗

本裁男椅の裁ち方

用布 並巾 9米 55糪

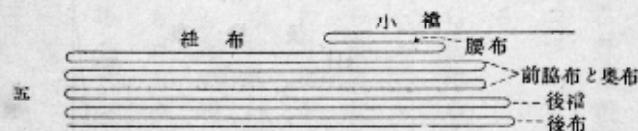


積り方

公式

1. 紐下 + 緒掛け代 + 縫ひ代 + 切り上げ = 後布丈
2. {總用布 - (後紐丈 + 腰布 + 小襠) + 裁違} ÷ 8 = 後布丈
 $\{955 - (85 + 23 + 61) + 14\} \div 8 = 100$
3. 後布丈 × 8 - 裁違 + 後紐丈 + 腰布 + 小襠 = 總用布
 $100 \times 8 - 14 + 85 + 23 + 61 = 955$

布の折り方圖



前 紐 後 紐 切り上げ
巾丈 三糪 六糪
巾丈 三糪 八五糪
巾丈 三糪 三糪 三糪 三糪 七〇糪

後巾の五分の一

布の数と裁ち方と積り寸法

後巾丈

一米(裾に巾の三二糪の處から切り上げを一糪つける)

後裆丈

九九糪(切り上げを五糪つける襠の高さは五一糪)

前脇布

丈一米(切り上げ三糪)

前奥布

丈九七糪(切り上げ三糪)

腰布丈

二三糪(但しこうに切つて使ふ)

小襠丈

六一糪(襠の高さ五一糪)

後紐丈

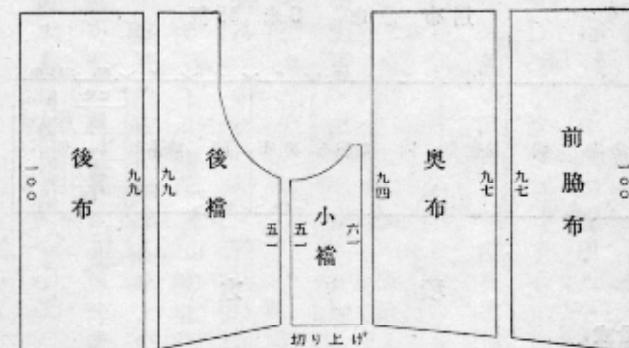
八五糪

前紐丈

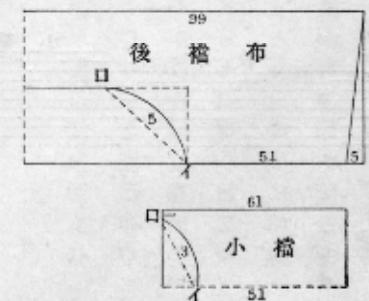
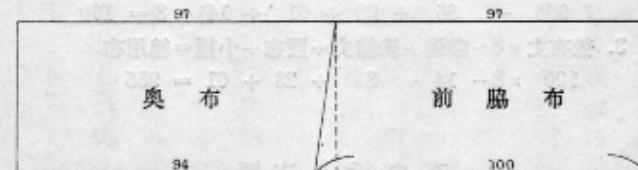
三糪—三糪七〇糪(全部の長さ)

附菱丈 八糪 巾一二糪

切り離した圖



裁ち方分解圖



鉢の入れ方

一 積り方が終つたならば、折り方圖のやうに折り疊み右の方が裾であるから、左の方に鉢を入れて、後布・後檔布・前脇布と奥布つづいたまま紐・腰布・小檔を切り離す、但し二枚づつ布はつながつてゐる。

一、後布 後布の裾を真直ぐに裁ち、市三十二種の處から檔附の方へ一糧三の切り上げを附ける。

二、後檔布 後檔の裾に五種の切り上げを附け、そこから檔の裁ち切りの高さを標しつけ、次に乘間より小檔巾を減じた残りの寸法を、後檔布の小檔附の方から計つて割りの巾とする、この割りの巾は普通は布巾の中央邊に當る、その割り方は檔の高さを標してイとし、その残りを二等分して中央を口とし、但し割りの巾標の上にこのイとロとの間に斜線を引いて、中央に五種ほど斜線の凡そ六分の一の丸みをつけて割る、その残りからは紐と附菱とを裁つ。

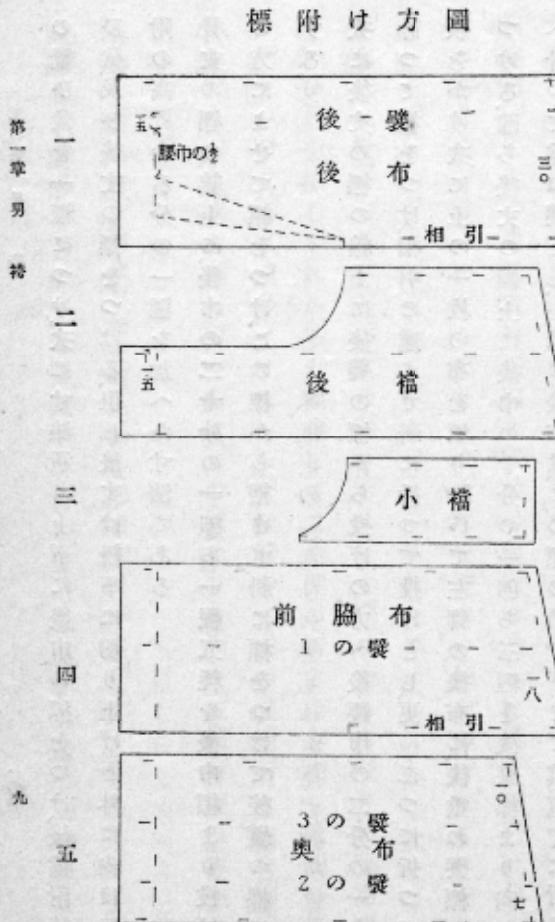
三、前脇布と奥布 丈を二つに折つて、折り目から奥布の方へ三種切り上げをつけると、前脇丈は一米で切り上げは三種つき、奥布丈は九十七種で切り上げは三種つく。

四、小襷 中表にして巾を二つに折り、裾を右に輪の方を手前に置き、まず裁ち切り襷の高さを輪の方に標してイとし、上部に奥布附の縫ひ代一襷を標してロとし、イとロとの間に斜線をひいて、その中央で約三種の二斜線の十分の一の丸みをつけて裁ち落し、輪の方も裁つ。

五、紐布と腰布 つづいてあるまま巾を五等分して前紐一本を裁ち切り、次に腰布を取り、その残り布の巾を四等分して二本を後紐、他の二本を前紐とす。

● 標附け方

一、後布 二枚の布を中表に重ね、裾を右に相引を手前にして置き、裾縮け代を出来上り一襷になるやうに標し、次いで相引の高さを標して、相引



の縫ひ代を一種につけ、次に寸法通り上下に後巾の標をつけ、後襦附縫ひ代及び後丈の標をつける。但し後丈は紐下に切り上げと外に尙ほ紐附の高くなる分の一纏を加へた寸法である。

後丈の標の線上に、後巾の二十分の一即ち一纏五耗を後巾標より投げの方によせて標をつけ、この標から裾まで斜に標をつけて後裻の標にする。

次に後丈の標の線上に後裻の標から投げの方へ後腰巾の二分の一を計つて標をつけ、相引の處まで斜に折つて投げとし、更に二つに折つて帳をかけ、次に上の一枚の布を取り除いて左脚の後布に、後重ね裻標をつける。即ち後丈の線上に後巾の十分の一即ち三纏を後裻標より向ふへ計つて重ね裻とし、左脚の後布は、この標の通り下まで真直ぐに折り、右脚の後布は後裻標の通りに折る。

二、後襦布

二枚の布を中表に重ね、裾を右にして圖のやうに置き、後布の

腰立て標にならつて腰立て、標裾筋及び小檔附の標をつけ、乘間の縫ひ代を一種五耗につけ、上の巾を裾につけて、その縞目を通して標をつける。

三、小檔

二枚重ねて置き、裾筋及び縫ひ代の標をつける。

四、前脇布

二枚の布を重ね、相引を手前に後布のやうに置き、裾筋け代、相引の高さ及び縫ひ代、丈の標をつけ、次に脇裻巾の標をつけて、これを一の裻の折り山と定め、次いで、奥布附の縫ひ代を標す。

五、奥布

二枚の布を中表に重ね、裾を右にして、圖のやうに置き、前脇布附の縫ひ代を標し、それから七纏離して二の裻の折り山を標し、乘間の縫ひ代を一種五耗に標つけ、それから十纏計つて三の裻の折り山を標す。三の裻の深さ、即ち重ね裻の山は、この標よりも尙ほ、五纏乘間の方へよせてつける。

注意 裹の折り目などには籠で標をつけず、糸標を用ふ。

四、縫ひ方順序

一、縫ひ合せ方、二、襞取り方、三、笠襞取り方、四、腰板の作り方(部分縫)
五、前紐附けと腰立て、六、仕上げ。

一、縫ひ合せ方

- 1 左右の投げを三種位の針目で表には極く細かく針目を出して絡ける。投げは斜でのびやすいから、のばさないやうに注意する。
- 2 後襦と後布とを縫ひ合せ、兩脚とも襦の方へ折りをつける。
- 3 前脇布と奥布とを縫ひ合せ、奥布の方へ折りをつける。
- 4 奥布と小襦とを縫ひ合せ、小襦の方に折りをつけ二種程の針目で隠し模をかける。
- 5 後襦と小襦とを縫ひ合せ、小襦の方に折りをつけ二種の針目で隠し模をかける。
- 6 乘間を袋縫ひにする。
- 7 相引を縫ひ、前布の方に折りをつける。

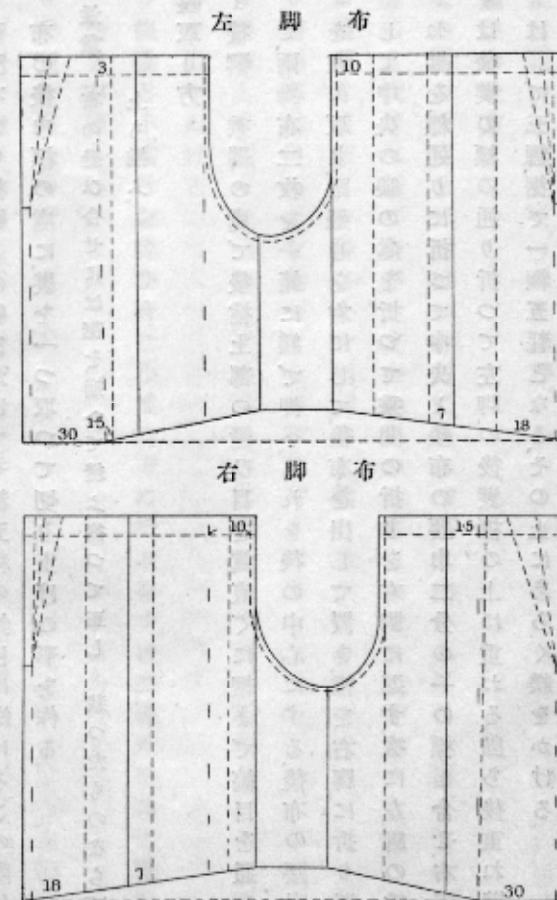
二、襞取り方

8、兩脚布とも、裾絡けの模をかけて一種五耗の針目に絡ける、この際、後布の後巾標の處に、襞を一つ取つて切り上げの形を作る。

注意 布の縫ひ合せには裾を揃へて縫ふ、從つて正しく裁つたものならば上も揃ふ。

- 1 後襞 乗間の處で後襦上部の縫ひ目を真直ぐに裾まで縞目を通して、兩脚布二枚と一緒に模で押へ、これを後の中間にする、後布の腰附を左に取り、蹴廻しを右にして、後布を出して置き、襦を右脚に折り返して中央の模の處を折つて乗間の折りを右脚に返す、次に左脚の重ね襞を標通りに折つて中央と後布の腰巾二分の一の標と合せ、右脚は後襞の標の通り折つて左脚の後襞標の上に重ねる、即ち後重ね襞は上で三種、裾で一種五耗となる、その上にあらく模をかける。
- 2 前襞 褒を取つた後布を下にし、前布を上に出して襞の山に折りを

縫ひ合せ方及び裊の取り方圖



つける、但し右脚は三の裊を折らずに置く。

乗間の前の縫ひ目を、乗間の後の縫ひ目に重ねて中心を定め、右脚三の裊標を中心にも重ねる、この時懷ろの裊の折り山は定まる。左脚三の裊標をこれに合せる、これより順に二の裊、一の裊を上下の寄せ裊巾の寸法通りに寄せて、裊をかける。

3 裱に上下共八種程離れた處にその寄裊巾と同寸法に飾り千鳥をする、同様にその中央にもする。

三、袴裊取り方

女袴と同じく、袴裊を作り、袴裊の折れた中を開き、上より相引の處の袴裊の消えた處まで縫ひ、その糸で裏を結び相引留に門留をする。

四、腰板の作り方(部分縫)

1 並巾六十粁の長さの木綿縞を圖に示した寸法の通りに裁つて、部分縫ひの練習をする。

部分縫用布の裁ち方

23	22	12	23
附菱	腰布	同	同
同			
	紐		

2 腰板紙の裁ち方 腰板紙は美濃紙二十枚程の厚みの板目紙を用ひ、前に掲げた普通仕立て上げ寸法の通りに裁つ、まづ腰板の巾と高さを以つて長方形を書き、次に腰巾の六分の一を兩端から計り、それぞれ斜線を引き、その通りに裁ち落す、流れを計つて、くるひがないかを試す方よし。

注意 荷地が絹布ならば上の左右の角を五耗程の丸みをつけて裁つ。

又別に半紙を三種の巾に裁ち、固く撫り又一巾の紙をもつて、そのこよりの上によりたし、腰巾の凡そ二分の一の長さに作つておく。

3 附菱布の裁ち方 腰巾の二分の一を附菱の巾とし、腰板の高さに一
種加へたものを丈として裁ち切る。

4 裏打ちの仕方 半紙をもんで、烙鑊で伸して置き、裏腰布と附菱布の周圍に浅く、淡い糊をつけて、前の紙で裏打ちをする。

5 表腰の貼り方 表腰布及び腰板紙の中央の裏にそれぞれ標をつけ、腰板紙の表側の下部に一巾の巾に糊をつけ、糊を一旦軽く拭き取り表腰布の下を裏の方へ一巾五耗折り返しの出来るやうにして中央をよく合せ、兩脇に布を平等に出して貼りつける。

6 附菱の位置 腰板の斜のまま計つて、その二分の一に四耗加へたも
のを附菱の高さとし、腰巾の三分の一に八耗位加へたものを附菱の
次に腰板の上部及び兩脇を裏の方へ折り返して貼りつける。

6 附菱の位置 腰板の斜のまま計つて、その二分の一に四耗加へたも
のを附菱の高さとし、腰巾の三分の一に八耗位加へたものを附菱の

巾として表腰に針を立て、標とす。附菱布の縦の方に一箇の折りをつけ、折り目を腰板脇の表に當て、先に標をつけた通り附菱の形を作り、形の崩れぬやうに裏側から烙鎧をかけておく。

次に表腰の附菱標に合せ、腰板脇と附菱とをけぬき合せにして、附菱の下方を裏に折り返して貼りつける。

7 紐締 後紐二本共その片方の端を十二箇程残して全部締ける。

8 後紐附とその留め方 紐の輪の方の端より二箇の處を、腰板脇の下から紐巾の高さの處に合せ、二本の撚り合せ糸を用ひて紐の裏側から針を出し、腰板の脇と紐とを一緒に抄つて糸を結び、その糸を切らずに、そのまま紐の下部腰板の角に針を出し、表返して紐巾を三角に折り、キの字に糸を掛けて留めて置く。

9 裏腰布附け方 裏腰布を一箇の縫ひ代にして、後布の腰立ての處へ當て、裏からあらく縫ひつけて置く。但し部分縫であるから袴の

後布の中心に二箇の襞を取つて右の方に折り返して襞をかけ、上の端から二箇の處に、中央から左右へ腰板巾の二分の一を計り、その残りを裏の方へ斜に折つて三つ折り新けをして投げとみなす。

10 腰立て方 表腰布の下の角の縫ひ込みを紐の中に入れ、紐の締け残した部分を締ける。表腰板の表を出して後布の腰立ての處へ真直ぐに當て、左右の投げを少し張り目にして附菱を起して待針を打ち、裏返して裏腰布を見て、圖のやうに數字の順序に糸をかけて腰立てをする。但し(5)と(12)の針は腰板と附菱の上の角とに通し、(14)と(15)の針は腰板に通して表裏の腰布と、紐の上とを少し抄つて共に糸をかける。又(16)の針は一度表に抜き出して直ぐ元の穴から斜に裏に通し、腰板にだけ針目の出るやうにして、裏で(14)から(15)に渡つた糸にかけて打ち留をする。

糸は二本撚り合せて用ひ、表腰には小さく針目を出す。腰立てが終

つたならば、裏腰布の上と脇を表より二耗位控へて折り、内側の周囲に糊をつけて表腰に貼り合せる。

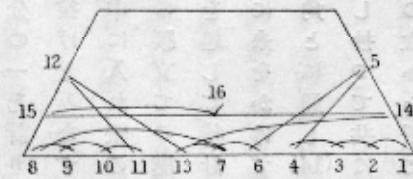
腰板の裁ち方圖



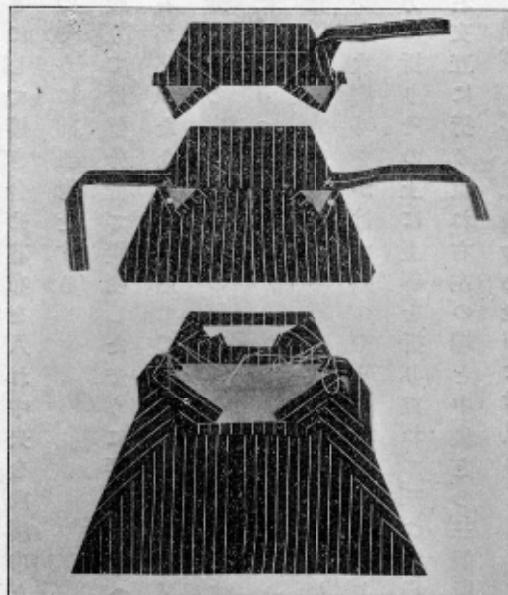
表腰貼り方の圖



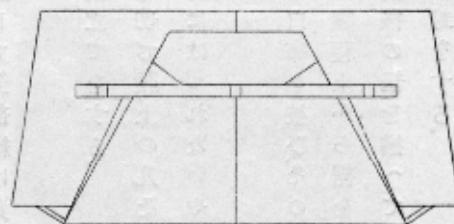
腰立て糸掛順序の圖



部分縫の圖



男持出来上りの圖



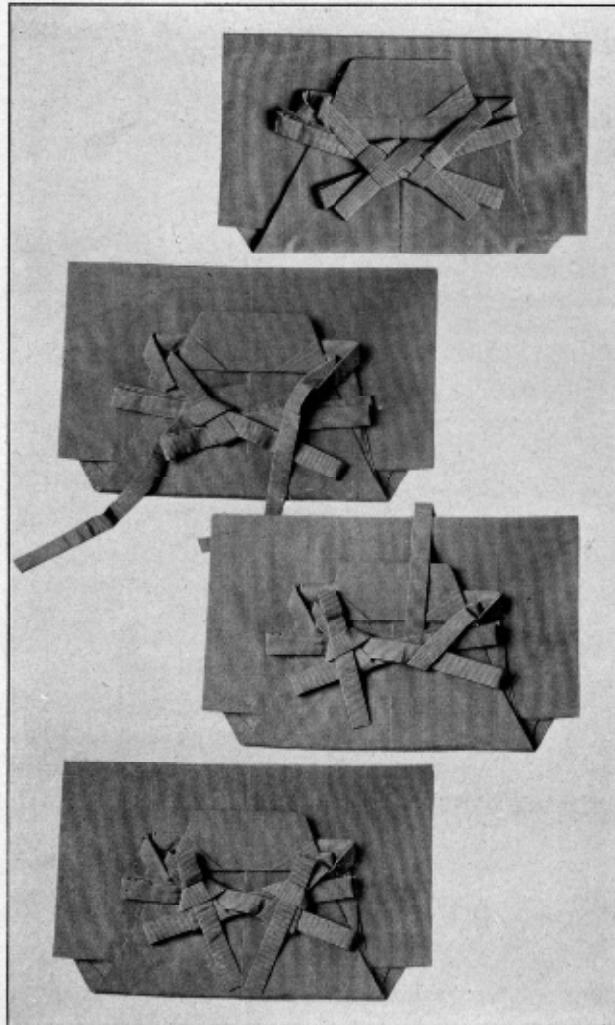
五、前紐附と腰立て 前腰巾の間に接ぎ目の出ぬやうに注意して掛け接ぎにして接ぎ合せ、芯布を入れ、中央を前腰巾だけ残して全部絹け、女袴のやうに前紐附をする。

腰立ては部分縫で説明したやうに腰板を捺へて腰立てをする。右が終つたならば引返して、絹布ならば真綿又は布切で股上の凡そ三分の一の處から乗間の縫ひ代を包み、縫ひ目より外にはづれないやうにかがりつける。

六、仕上げ 木綿物は薄く霧を吹いて、鍼を伸し、絹物は白布を被ひ、その上から火熨斗をかけて、圖のやうに相引の中央より四種程上から裾を上方に折り、その上に上部を折り重ねて三つに疊み、前後の紐を捺へて左右交互に折り重ね、右左の端と中央との三個所に紙封をする。

備考 一、裁達十四種の説明をせよ。

二、男袴腰立て糸掛順序を問ふ。



袴の紐の疊み方種々

第二章 男物單衣羽織

單衣羽織は春の終りから秋にかけて着用するもので從つてその地質は男物に紹紗透綾麻セル等が用ひられる。女物には紹紗縮緬紗疊御召等が用ひられる。

セル等の地厚物には甲斐綿羽二重等を肩の滑りをよくする爲に肩當に用ひ、地薄物には肩當は使はない。しかし肩廻りのいたむのを避ける爲に斜布を少し肩廻りだけにつける。

一 普通仕立上げ寸法

袖丈	着物と同寸	身丈	着丈の四分の三に四種
袖口	着物と同寸	後巾	加へる一米五種内外
袖附	總附にする	着物と同寸	
袖巾	着物と同寸	前巾	いつぱい

衿巾 七種五耗

襷巾 七種五耗

衿肩明 着物より五耗増し 前下り 三種五耗

襷巾 着物と同寸

乳下り 背から四五種内外 褄 着物と同寸

襷巾 着物と同寸

縫越し 五耗 褄の折り返し 一〇種内外

用布の丈の短かいものは襦を鉤裁ちにし、充分あるものは棒襦に裁つ。草衣羽織は衿羽織と違つて、裾の折り返しを三つ折り縮にするから、身丈の出来上りに三つ山の縫ひ代と、裾の折り返しの二倍とを加へたものを縫越しの裁ち切りにする。

前丈は、後丈に専縫越しの二倍と、前下りとを加へたものである。

襦の補ひ布は裁ち切り袖口布丈から袖附寸法を減じ、それに縫越しと襦上縫け代(一種)とを加へて二倍したものである。

而して、補ひ寸法を出してから、積り方公式のやうに積つて後丈を求め、次

いて前丈もそれに縫越しの二倍を加へた寸法に裁つのであるから、實際に襦の補ひ丈として裁ち落す寸法は、左右の前身頃の縫越し分即ち、縫越しの四倍だけ先に求めた補ひ寸法より短かく裁ち切るのである。

但し前裾を斜に裁ち切るのは標附け方の時にする。

● 標附け方

一、袖 中表に兩袖を別々に丈を二つ折りにして例の通り置き、袖丈・袖口・袖巾・山丸みの標をつけ、次いで袖口布の標をつける。

袖口布の丈を二つ折りにして、二枚重ね、裁ち目を袖口にして、縫ひ代は一種とし、袖口の標は表よりも二耗つめ、丈巾をいつぱいに標つける。

二、身頃 左右の身頃を中表に二枚合せ、衿肩明と前落しの裁ち目は、特に動かぬやうによく捕へて針を打ち、肩に假締をかけ、正しく重ね、前身頃を下に、後身頃を上に背を左手前にして縫越しをつけて置く。

身丈・背縫ひ代・袖附・肩巾・後巾の標をつけ、次に裾の折り返しを計つて、そ

單衣羽織の裁ち方

用布並巾 9米97幅

55	×	×	×	×	256		122	木	123	木	123	木	122
袖	同				衿		身	頃	身	頃	身	頃	
三六							前丈						
							袖口	同	袖口	同	袖口	同	

35
122 705×68 68 705

積り方

公式

$$\text{出来上り身丈} + \text{三つ山縫ひ代} + \text{折り返し} = \text{後丈}$$

$$\text{後丈} + \text{縫越し} \times 2 + \text{前下り} = \text{前丈}$$

$$\text{後丈} + \text{縫越し} = \text{脇丈}$$

$$\text{脇丈} - \text{縫附} + \text{縫上継け代} = \text{襟丈}$$

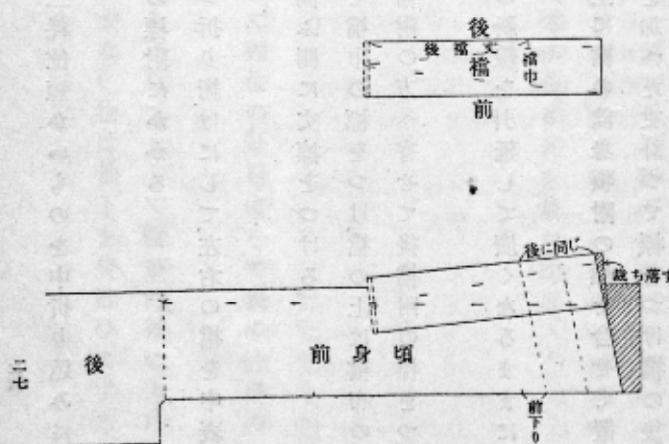
$$(\text{裁ち切り袖口布丈} - \text{袖附寸法} + \text{縫越し} + \text{縫上継け代}) \times 2$$

$$= \text{襟の補ひ寸法}$$

$$(\text{總丈} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{袖ひ丈})) \div 4 = \text{後丈}$$

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{後丈} \times 4 + \text{襟の補ひ寸法} = \text{總用布}$$

標附け方圖



の寸法の二分の一より少し(一耗位)短かいものを中折り込みにして標をつける。

後檔附の丈を計つて置き、檔の標附にかかる。

三、檔 檔の上を五耗の巾の三つ折り絶けにして、左右の檔を巾表に重ね、檔の上を左にして置く。

档の上より後檔丈を計つて、向ふ側に丈標をつける。

次に檔布の中央を中心にして、檔巾の標をつけ、檔の上は檔布の中心に標をつけ、上檔巾の三耗を後檔附の方へ寄せて後檔附の標をつけ、次いで前檔附の標をつける。

尙丈標から下の巾は、上の巾の斜線を引延して廣くなるままにしておく。

この檔を前身頃の脇の標の上に檔の前身頃附の標を合せて置き、前身頃に前丈(後丈標に前下りを加へた丈)計つて標をつけ、檔の後丈の標

と前下りの標とに尺度を當てて、前下りの斜の標をつける。

次に裾絶け代の折り返しの標を、後身頃と同じに定めて標を附け、前布と、檔布とに斜めの無駁切が出るから、これを裁ち切る。

四、衿 栄羽織に同じ。

(四) 縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、前檔附、四、衿附、五、後檔附、六、袖附、

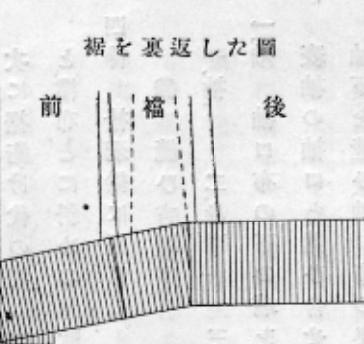
一、袖 袖口布の下の端を浅く折つて押へ縫か、又は三つ折り絶けにして、表袖の袖口と縫ひ合せ、栄羽織と同じやうに袖口の留をして、その糸で袖下を縫ひ、袖口布の奥を折り、二種位の針目にして、表に針目の目立たぬやうに注意して絶ける。

二、袖下は地厚物の場合には、外袖を四耗ずらして縫ひ、内袖の方に絶けつける。地薄物又は縫ひ込みの少ない物は袖下を袋縫ひにする。丸み二と申縫ひ代の二倍は浅縫を省く。

二、身頃 背縫は普通二重縫ひにする。耳に鉄を入れた場合、又は耳の色の異つて居るものは袋縫ひにする。

三、前檔附 前檔を向ふに、身頃を手前にして檔附の標を合せ、身頃を見て檔の出来上りだけを縫ひつける。

次に裾は一旦形を整へ、標を正し、糸標をつけから開いて裾の中折込みの標までを縫ひ、きせをかけて表返して裾を三つ折りにし綱をかける。



四、衿附 衿の入れ方、芯の入れ方、衿附け方等衿羽織に同じ。但し絹等の仕立の場合には芯をとぢつける糸は共色の糸を用ひ、表からとち糸のすけて見えないやうに注意する。

五、後檔附 次に身頃を手前にして後檔と後身頃との丈の標を合せ、身頃

は真直ぐに、檔は標通りに合せて、裾新け代の中折り込みの處まで待針を打つて縫ひ、きせをかけて表に返し、裾新け代を前身頃にならつて折り、一粋五耗の針目で表に目立たぬやうに注意して新ける。

六、袖附 袖附の留は袖下の折り山に、表袖の裏から針を出して檔の上で身頃の後前のきせ山を突き合せて、布を横に抄ひ(檔の布は抄はぬこと)最初の針にならべて表袖の折り山の際に表から針を入れて糸を結び、その糸で袖附をする。袖をつけたならば、檔の縫ひ代を脇縫ひ代に新つけつけ、更に脇縫ひ代の耳を折つて身頃に新けつける。身頃の縫ひ代の少ない物は檔の縫ひ代を身頃に新けつけ、次に八つ口を新ける。

注意 一、セル地を以つて男の單衣羽織を縫ふには裾新け、檔附の縫ひ込み等は全部千鳥掛とし、袖口の奥も千鳥で押へる。尙丁寧にするには、袖附の縫ひ目は半返し縫ひにして割り、その他の要所も半返し縫ひにする。

その標附けの時、極く地薄のものはきせを極めて少なくして標をつける。布はそれ易いから待針を打つか、又は縫をして動かないやうにしてする。

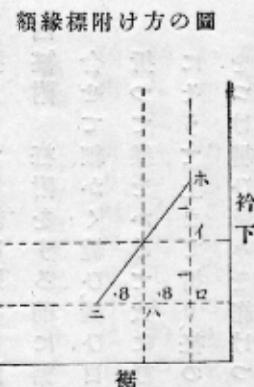
一、袖 袖下は外表にして極く淺い縫ひ代で縫ひ、割つて縫ひ目を縫ひ代だけずらし、裏返して標をつける。

袖口絎け代は五耗位として、耳のつれて居る物、又は巾の廣い物は裁ち切つてもよい。他は普通にする。

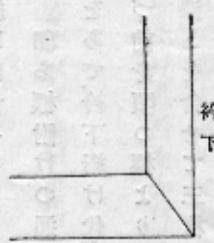
二、身頃 繰越しの分は後身頃の七八つ口より二纏下に揚をする。その標附け方は男物の内揚の仕方に同じ。

三、衽衿 全部普通單衣と同じに標を附ける。尚衽の裾には額縁の標をする。

額縁の標はまず裾の裁ち目より一纏づつ二本標をつけ、衿下の方に一纏五耗を計り、その中間に標をつける。イ・ロの巾をホに移し、ロハの巾をニに移し、ホ・ニの間に斜線を引いて、縫ひ合せの標にする。



額縁標附け方の圖



額縁出来上りの圖

三 縫ひ方順序

一、袖、二、脊縫、三、脇縫、四、衽附、五、衿附、共衿、六、袖附

針目は全體細かく三耗位とし、地質によつてはもつと細かく縫ふ。糸はなるべく繼がぬやうにする。もし繼ぐ時は撲り繼にするがよく、場所によつては木綿物と同じやうに重ね繼でもよい。縫ひ目には必ず平烙錠をあて、折り烙錠は決して使はない。明石縮のやうなしほのあるものは特に注意して伸ばさないやうにする。

一、袖 袖口は細い撲り絎とするか、又は極く細く三つ折り絎にする。袖口布をつける場合は男物單衣羽縫のやうにする。

二、背縫 耳の變つたものはそのまま袋縫ひにするか、又は裁ち切つて、袋縫にすることもあるけれども、主に地薄物は肩當居敷當を用ひないから、背縫は切り伏せとて、其布又は同じ色の布を背の縫ひ目にあて、三枚一緒に縫ひ、折りをつけて一方に絎けつける。

三、脇縫 脇縫は普通に一度縫つて更に脇縫より八耗離して今一條縫ひ、折りをつけ、縫ひ込みを開いて三つ折り絎けにする。

四、衽附 舟附をする前に裾の額縫を縫ふ。即ち標附けの通り、斜の標を合せて細かく縫ひ、縫ひ目を割つて烙鑊をあて、衿下絎け代・襦絎け代を折つて、領をかけて次に舟附をする。まづ前身頃の標より八耗多く標にそろて今まで折り、舟の標と前身頃の標とを合せて三枚を縫ひ、折りをつけ、縫ひ込みを絎けつけ、次に衿下及び裾を細かく絎ける。

五、衿附 普通單衣とつけ方は變らない。しかし地薄物は肩當がつかないから、斜布で月形の物を捲へて、衿肩廻りの裏衿附けの際につけて一緒に縫ふ。表返して衿の仕末をして絎け上げ、其衿をかける。

六、袖附 折り附にせず、普通につける。

七、備考 一、薄物單衣を仕立てるについて注意すべき事柄を問ふ。

二、薄物單衣の仕立て方

大入替

普通の仕立て方を示す

普通の仕立て方を示す
普通の仕立て方を示す
普通の仕立て方を示す

第四章 丸 帯

丸帶の材料には、綾織・錦唐織・繡珍・厚板綿子・博多羽二重・綾子・鹽瀬・紹緞等が主なものであるが、この外にもまだ澤山種類がある。

● 普通仕立上げ寸法

大人物

巾 二六纏—三二纏

丈 三米八〇纏—四米二〇纏

子供物 十二・三歳用 十歳用 六・七歳用

巾 二六纏

丈 四米内外 三米五〇纏 二米九〇纏

● 布の整理

二、表地耳直し 耳のあまり厚くないものは、腹合せ帶と同じやうに伸し、

耳の糸の硬く厚くて、しかも釣れて居るものは、その部分だけ切り取つて前のやうに伸す。

二、垂と手の織り出しの整理 垂と手の織り出しは、直角になるやうに手で充分直し、尙全體の横の布目をも正す。この時少し温りを與へてもよい。

三、地のし 裏から火熨斗をかけて全體の地のしをする。

芯の地のしは腹合せ帶に同じである。

● 注意

交織物は絹と綿とは熱に對して縮む度が違ふ爲、火力を用ひて耳を伸ばすと時には不同に伸縮することがある。この時は手で伸ばす方がよい。しかし全體に裏から一樣に、地のしをすることは差支はない。

● 標附け方

一、布を二つに折り、織り出しを揃へて垂と手の假とぢをする。普通織り

出しは一つだけ出す。しかし品のよい物は好みによつて二つ出し、更に、その先の無地の處を三種位出して仕立てることがある。

文字を織り出したもの(例へば縞子等)は文字の隠れないやうに且つ文字が巾の中央に恰好よくする。手は垂と同じやうに織り出しを普通は一つ出すが、無地の處を垂の方に出したならば、手も同じやうに垂と捕へて出す。

右のやうにして、丈の標をする。

二、巾の中央を、腹合せ帶のやうに四十種おき位に待針をして縫ひ目の外に假とぢをする。

三、仕立上りの帶巾よりも、二耗廣くして巾の標をかるく通し竪にしてつける。

四 縫ひ方順序

一、縫ひ方 縫ひ方は、大體腹合せ帶に同じであるが、片

丸帶仕立上りの圖



側に縫ひ目がないから縫ふ必要がなく、又中央より少し手の方へよつた處を、帶巾より四種位廣く縫はずに明けて置き、左右の端は四十種程度半返し縫ひにし、外は一針抜きに極く細かく、しかも縫ひ目の縮まぬやうに縫ふ。手や垂の端は横の織り糸を通して真直ぐに半返し縫ひにする。

二、折りつけ方 縫ひ目に平烙鉗を充分にかけて手で兩端を折り、次に縫を折る。角は腹合せ帶と同じく縫ひ込みをとぢる。

三、芯の入れ方 芯は帶巾より二耗せまく裁ち切り、眞綿を引き、縫ひ込みの折れて居る方に芯を重ねる。芯の弛みは凡そ、四十種について五耗位とする。帶皮のみを引張つて、芯の落ち落きを見、待針を打つて芯の丈を切り、兩端と一方の縦の縫ひ込みとに芯をとぢつける。芯には眞綿を引く。一角を先に少し返しておいて、帶を巻き、縫ひ残した處から、表に返して、腹合せ帶と同じやうにゾベ糸で縫ひ目に縫をかけ、縫ひ残し

た處を細かく絶ける。

四、仕上げ 四角の角に引糸をつけ、その糸を引張つて角を真四角に出して火熨斗をかけ、壓をおき、六つ又は八つに疊んで、紅白の絹糸でとぢをし、菱に飾り糸をかける。

三、縫合の仕方 細い糸で縫合する。縫合する際には、糸を正しく通す。縫合の際には、糸を正しく通す。

二、縫合の仕方 細い糸で縫合する際には、糸を正しく通す。

一、縫合の仕方 細い糸で縫合する際には、糸を正しく通す。

第五章 男 帯

材料の種類は、絹布には、博多織・絹珍・緞子節糸・緞・琥珀綾織・紺博多紗等があり、綿布には、小倉瓦斯・小倉紙布等がある。

一 普通仕立上げ寸法

大人物	子供物
巾 一〇粁——一一粁	七粁——八粁
丈 三米八〇粁——四米一〇粁	二米五〇粁——三米

二 布の整理

女物と同じやうに耳を伸す。横の布目が明瞭な物が多いから、布目が正しくなるやうに裏から火熨斗をかけて、平にし、棒に巻いて充分に地伸しをする。

芯の地伸しも女物に同じである。

三 標附け方

巾を二つに折り、縫ひ代の邊を假とぢする。但し地質によつてはこのとぢを省く。巾の標を仕立上げ寸法より一耗位廣くして、軽く通し籠でつけ、次いで丈の標をもつける。

仕立直しの物は、前の折り日の出ないだけに巾、丈をつめる。又輪の方の折り目も、少し何れかへずらした方がよい。

四 縫ひ方(縫ひ仕立て)

兩端十五纏位宛残して巾標の通り半返しに縫ふ。縫ひ目に平烙饅をかけ、手で表へ軽く折りをつけて尺度で表へ引返し、表から縫ひ目の折りを正して芯を入れる。

一、芯の入れ方 芯は物によつて、一枚芯か、又は二枚芯にする。すべて巾いっぱいに入れる故仕立上げ帶巾より二耗位狭く裁ち切り、芯の一方に厚紙をつけて、その先に紐をつけ、紐の先に錘^{モチ}になるものをつけて、一

方から入れて引き出し、芯が正しく巾いっぱいに含まるやうに整へながら入れる。

二、引合とつり合 一方で帶側と芯とを持ち、他の一方で帶だけ持つて引張つて引合をする。それから下に置き兩手で帶側と芯との三枚を撫でて、つり合をよくし、芯を丈いっぱいに裁ち切る。

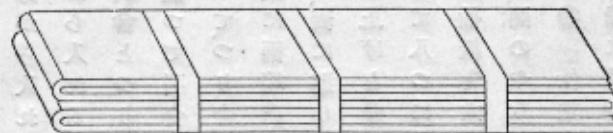
次に兩端を縫ひ残してある處から裏返して、半返しに縫ひ、芯をとぢつけ、表に返して残りを細かく絹け上げる。

三、仕上げと疊み方 兩端から火熨斗をかけて、仕上げをし、丈を二つに折つて八つに疊み、兩端を腹合せ帶のやうにとぢて壓をかけ、次に半紙か畫仙紙を六纏位の中に切り、二本接いて、巾を三つ折りにして、二纏巾とし、圓のやうに三箇所を巻き、しつかりと締めて貼りつける。

五 仕立方別法(絹け仕立て)

男帶は縫ひ仕立の外に、絹け仕立にすることがある。それは巾標をい

男帶仕立上りの圖



つぱいにつけて、表を出して標の通り、縫ひ代を裏へ折り、芯をとぢつけて、端を縫ひ、メリケンの八番位の針で、細かく針目の流れぬやうに注意して縫ける。
この時糸をゆるめぬこと、縫け目がつれないやうに注意することが大切である。

第六章 小袖模様及び紋について

● 小袖

小袖の着物とは古は紺布の綿入に限つた稱へ方であつたが、現今は、汎く男女衿綿入にかゝわらず、表裏紺布の着物を小袖といつて居る。

小袖の種類には、裾廻し附と、無垢とがある。

イ、裾廻し附 紋及び裾模様のつかないものは、裾廻し布には無地、型附、模様物等、調和のよいものを用ひ、女物は女物衿に、男物は男物衿と大體變りがない。

ロ、紋及び裾模様のつくものには、一枚物もあり、重ね物もある。又裾廻しは共布を引返しにして置く物が多い、この引返しの物を無垢といふ。紋附類は、大抵無垢である。但し小紋の紋附は稀に變り色を裾廻しに使ふことがある。

小袖の材料の地質には、縮緬、羽二重、錦紗、綾織、紋織、大島、銘仙、米澤織、斜子、八丈等がある。

（一）模様の種類

總模様 全體に模様をつけ、振袖とし、紋はつけぬことが多い。

島原模様 裾の方は、裾模様の如く、又胸の邊にも模様をつけたもので、袖は振袖とし模様をつける。

裾模様 祀前後と次第に模様を低くつけたものである。振袖は袖にも模様をつけ、止袖は模様をつけぬ。

江戸襷模様 祀から前身頃へかけて模様をつけ、その高さは人々の好みによつて七十粁位から三十五粁位にする。

菱模様 祀にのみ模様をつける。

片襷模様 下前の裏衽にのみ模様をつける。

襷模様 襷にのみ模様をつける。



模様の種類
（一）

熨斗目模様 腰と袖とに模様をつける。これは男子用に多い。

右のやうな男女の模様物には、凡て三個所又は五個所に紋をつける。

三 紋所の位置及び寸法

本裁女物

四つ身

三つ身

一つ身

背紋下り

背裁ち
切りより

六纏五耗

七纏

六纏

五纏五耗

五纏五耗

袖紋下り

袖山より

七纏五耗

八纏

七纏

六纏

五纏五耗

抱紋下り

肩山より

一五耗

同上

一三纏

一一纏五耗

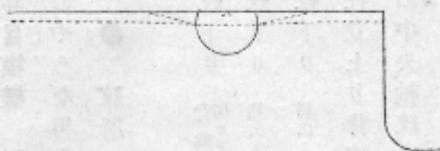
一〇耗

仕立上り背紋下りは、これより一纏強を減じたものである。背紋は背縫の中央、袖紋は袖巾の中央、又は少し袖附へよせる。抱紋は衿肩明を除いた前巾の中央につけるものである。

四 紋の縫ひ方

背縫をする前に、紋の部分のみを表より兩身頃を揃へて出来上りの形に右身頃の上に左身頃をのせて、折り山の極く際を紋合せのくずれぬや

紋の合せ圖



うに縫糸で一針ぬきに押へておく。この形を整へる爲に烙鑊をかけることもある。次に裏返して背縫ひのきせのかからぬやうに白い部分のみをなるべく細かく一針ぬきに縫ふ。縫ひ糸は、白の絹糸、或は羽二重糸を用ふ。拾、縫入等すべて裏のつくものは、紋合せの糸

を紋の上下四種位づ、耳の方で斜に縫ひ目に合ふやうに斜め縫ひにし、紋の際で、細かく一針返す。

但し紋の部分は、中の地色の處は、地色の糸で縫ひ又白い處の長い紋は、白い糸の上の處を一・二個所小針に縫つて糸の弛みをふせぐ。

薄地物の時は縫つた糸が表から、すけて見えぬやうに注意する。

第七章 小袖拾重ね

● 小袖重ね下着の寸法つめ方

女物拾重ね

上着より

九耗つめる

男物拾重ね

上着より

六耗(人形で三耗つめる)

袖 袖 袖 袖 袖 袖 身
前 巾 巾 巾 附 口 文
衿 肩 明

衿丈 左右各一 縫つめる 一 縫つめる

肩巾 四耗増す 四耗増す

袖身八つ口・衽巾合棗巾衿下・衿巾・衽下り等は同寸法である。

右は二枚重ねの時の寸法つめ方である。稀には三枚重ねもある。三枚重ねの時には、中のものを普通の寸法に仕立て、上下着物の寸法を右の割合で増減するものとすればよい。

以上は上着・下着とも同地質のものを標準としての寸法のつめ方であつて、地質の違ふ物は、適當に加減することが大事である。即ち上着縮緬で、下着羽二重等を重ねる時には、縮緬にもよるけれども下着の身丈を上着より却つて長くするものである。又身丈ばかりでなく袖丈や衿等も加減することが必要である。

● 裁ち方と積り方

裁ち切り寸法は、男物は男物衿に、女物は女物衿に大體同じである。

女小袖無垢一枚の裁ち方

用布並巾 15米8糲

袖	同	裾の引返し	身頃	身頃	衽	衽縫	衿
62	60	152	152	60	152	152	60
							132 100 180

75 50 57

積り方

公式

$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 5 - \text{衽下り} + \text{裾の引返し} \times 4 + \text{衽縫} + \text{衿丈} \\ = \text{總用布} \end{aligned}$$

紋附模様物を裁つには、充分注意して、紋又は模様を合さねばならぬ。模様の具合によつては多少寸法を斟酌しなければならないこともある。

三 標附け方

大體木綿物に同じであるけれども、裏は木綿物より稍少なくつめる。模様物は裁ち方ばかりでなく、標附け方に於ても充分注意して模様を合せ、模様の都合によつては寸法を多少斟酌しなければならないこともある。且つ模様物は、豫め模様を合せて糸標をつけてからする。又地質によつて重ねて標の附けにくい物は針でよくとめてし物によつては一枚づゝする。標の附けにくい物は絹布標附用の烙鑊を温めて標をつけてもよく、又糸標をつける等のことが必要である。標附け方は、上着・下着表裏ともなるべく同時につゞけてする方がよい。

四 縫ひ方順序

一、袖、二、上着身頃、三、下着

大體木綿物に同じであるけれども、材料の取り扱ひ方に充分な注意が要る。縫ひ目には平烙鑊をかけ、きせをかけて折り目に烙鑊をかける。要所には綾をかけ、地質によつては縫ひ綾をかける。

一、袖 裏袖に袖口布を廻しがけにし、袖口を表裏合せて縫ひ、綿を入れる時は眞綿の耳を細く裁ち切つて入れる。袖の仕立て方は木綿物と大體變りがない。ただ八つ口が地薄ならば紅絹・白絹等裏と同色の細い布を芯に入れて縫ふこと等も必要である。

二、上着身頃 表身頃・裏身頃の背脇縫・衽附をし、裾合せをする。凡てよく模様物は合はすことが大切である。綾をあげ、裾には眞綿を少し引のばして入れ、表返して、裾合せをした處から針を入れてよく綿を含めて綾をかける。

縫とぢをし、身八つ口を縫ひ、袖附・衿附・衿掛・裾とぢをして仕上げる。

三、下着 通しの物と、胴抜きの物とあつて一様にはゆかぬけれども、要す

るに着用して着崩れのせぬやう上着とよく重なることが大切である。特に男物の重ねは、女物より一層寸法を正確にして、袴衿先等の不揃ひのないやうに注意する。表は模様の都合によつて身巾が多少寸法通りにゆかぬこともあるから、下着も上着に準じて仕上げるのである。標附け方は上着に準じ、縫ひ方も衿重ねならば上着の通りただ寸法をつめるばかりで、襷の大きさ、襟の形等上着と違はずぬやうに注意し、その他はすべて上着の通りである。

附記

一、小袖綿入重ね下着の寸法つめ方

女物綿入重ね	男物綿入重ね
袖丈 一纏内外つめる	一纏内外つめる
袖口 四耗つめる	六耗つめる
袖附 四十八耗つめる	一纏つめる

袖巾	四耗つめる	四耗つめる
身丈	四耗つめる	四耗つめる
後巾	四耗つめる	四耗つめる
前巾	八耗つめる	八耗つめる
衿肩明	四耗つめる	四耗つめる
衿丈	左右各一纏つめる	一纏つめる
肩巾	四耗増し	四耗増す

二、綿入重ねは上着を口綿として、下着全體に綿を入れるのが普通であつて好みによつては上着全體に綿を入れ、下着を口綿にしてもよい。

三、綿入重ねには小袖綿を入れることもあるけれども、真綿を入れる方がよい、批にも真綿を入れると、裾さばけがよいが、批の太い物は小袖綿を芯にすることもある。

眞綿は着物の形に出来た物を入れる時は、あまり困難を感じないが、もし袋真綿を入れる場合は、よく引きのはして綿のつれぬやうに平において

その上に火熨斗を軽く當て、落ちつかせて表に返す。

第八章 比翼

比翼とは、一枚の着物で袖口・八つ口・裾廻し等すべての廻りを二枚重ねのやうに仕立てたものをいひ、本比翼と附比翼とがある。本比翼とは、上着を仕立てる際下着を共に縫ひつけたもので、附比翼とは普通の着物の下に、下着廻しを附けたものである。それに衿・締入の別がある。

比翼は口綿のものが多いから本章では主として口綿本比翼を述べる。

一 裁ち方と積り方

比翼無垢表の布數と裁ち切り寸法

上着	下着	表袖口被	二枚	五七粁
袖	二枚	六二粁		
身頃	二枚	一五二粁	袖口布	二枚
衽	二枚	一三三粁	衿	一枚

衿 共衿 裾廻し 紅裾廻し 袖口布	一枚 一枚 一枚 一枚 一枚	一八〇纏 八〇纏 五五纏 九五纏 五七纏
衿先布 表裾 表紅裾 裏紅裾廻し	二枚 二枚 二枚 二枚	一七纏 一七纏 一七纏 一七纏
袖口被 四枚	四枚	四六纏
共衿 裾廻し 紅裾廻し 袖口布	一枚 一枚 一枚 一枚	九九纏 九一纏 五五纏 八〇纏

比翼無垢に要する布數は總計四十二枚である。このやうに布數が多いから、積り方にはよほど工夫が要る。まづ袖丈身丈衽丈衿丈等の裁ち切り寸法を仕立て上げ寸法によつて定め、次に袖口布五十七纏、共衿七十纏以上、衿先布二十纏、紅裾廻し九十纏、八つ口被四十五纏位の標準で適宜に寸法を定め、これ等を總用布より減じて残りを調べ、次に裾廻しの丈を定め、その長短によつて多少他の寸法を加減し、又は裁ち合せを考へる等

比翼無垢表の裁ち方

並用布 22米88纏

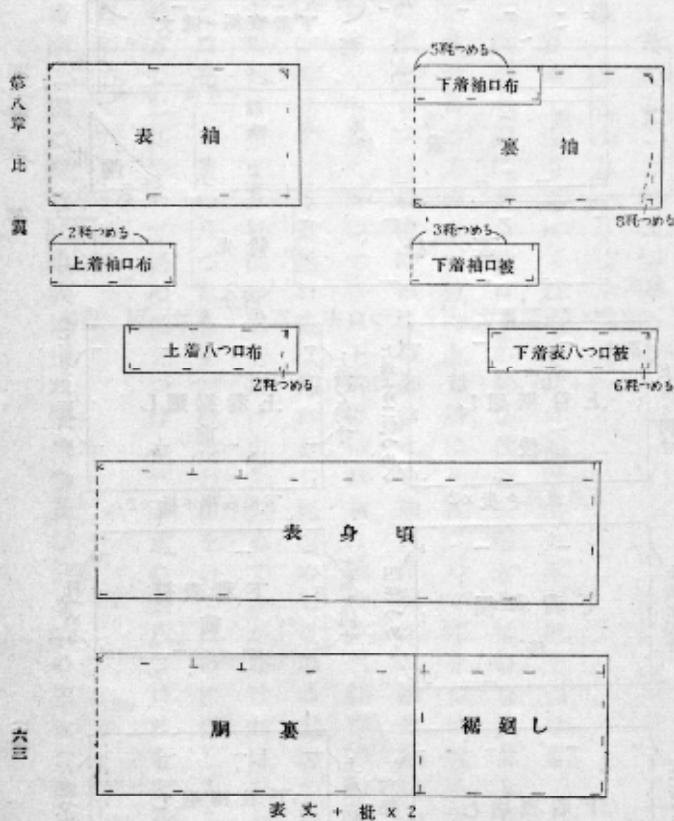
第八章 比翼裏	袖	同	裾廻し	身頃	裾廻し	身頃	裾廻し	衽	衿	共衿
	九五			九五				同	同	同
下着表 衽裾	91	95	95	57	57	55	"	51	"	51
	下着衽	上着衽	袖口	同	同	下着裾廻し	同	下着表裾	同	下着表裾
別に縫切を要す	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被	八つ口被
	46	47	46	47	46	47	46	47	46	47

積り方

公式

$$\begin{aligned}
 & \text{袖丈} \times 4 + (\text{身丈} + \text{裾廻し}) \times 4 + \text{衽丈} + \text{衿丈} + \text{共衿丈} + \text{下着衽裾} + \text{上下紅裾廻し} \times 2 + \text{袖口布} \times 2 + (\text{下着表裾} + \text{下着裾廻し}) \times 4 = \text{總用布} \\
 & 62 \times 4 + (152 + 55) \times 4 + 133 + 180 + 80 + 91 + 95 \times 2 + 57 \times 2 + (55 + 51) \times 4 = \text{總用布}
 \end{aligned}$$

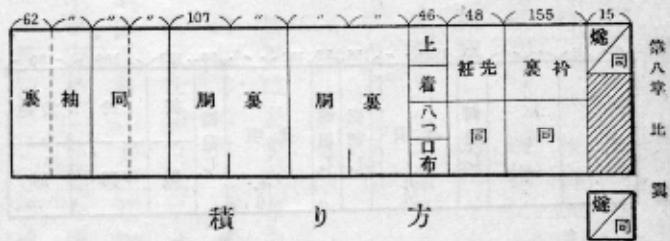
標附け方図



六三

比翼胴裏の裁ち方

並巾用布 9米40幅



公式

袖丈 × 4 + 胸裏丈 × 4 + 八つ口布 + 粽先 + 裏衿 + 縫 = 裹總

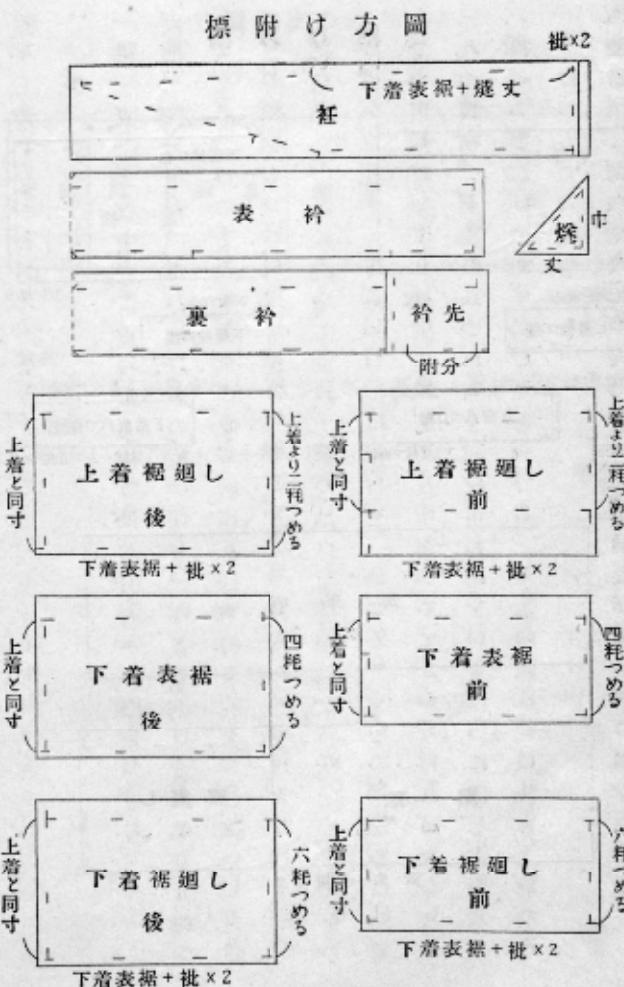
用布

$$62 \times 4 + 107 \times 4 + 46 + 48 + 155 + 15 = 940$$

第八章 比翼
裏

六二

大表圖



種々工夫することが大切である。

● 標附け方

- 一、袖 表袖二枚中表に重ね、袖丈・袖口・袖附・山・丸みの標をつける。
裏袖二枚を中表に重ね、袖口下の縫ひ代を一粂とし、袖口を表より五耗つめ丈を八つ口の方の十粂位の處で斜に八耗つめて標をつけ、次いで丸み・山等の標をもつけ、最後に袖口布をのせて、袖口布かけの標をつける。
- 二、袖口布 中表に折つて重ね、上着の袖口布は袖口を二耗つめ、巾・丈をいづばいに標す。下着袖口被は袖口を三耗つめて、丈・巾の標をつけ、而して上着袖口布より袖粂の二倍だけ巾をつめておかなければならない。
- 三、八つ口布 上着の八つ口布を四枚重ね、巾をいづばいに標し、丈を八つ口の方で二耗つめて斜に標をつける。下着の表八つ口被も上着の八つ口の方で六耗つめる。
- 四、表身頃 例のやうに中表に重ね、後身頃及び前身頃の標をつける。

五、燧布 表裏の燧布を中表に重ね、丈、巾の縫ひ代をいつぱいに標をつけ
る。

六、胴裏と裾廻し布 胴裏を中表におき、その上に裾廻し布(上着下着の分)
八枚を揃へて重ね、表身頭より祉の二倍長くしておき、胴接ぎ・丈・燧の巾
身八つ口・巾・衽下り等の標をつける。後前ともそれぞれ重なる順序を
考へて裾の方で順に巾を少し宛つめて標をつけることは標附け方圖
の通りである。下着の表裾は裾廻し布より祉の二倍だけ短かく標を
つけ、後前とも裾の方で巾をつめておくことは前に述べた通りである。

七、衽 上着、下着の表衽を揃へ同じく裏衽、裾廻しを揃へ、裏の分は裾で祉
の二倍長くして重ねておく。八枚重ねて標つけることが困難ならば
四枚宛つけてもよい。丈・衿下・衽巾合接ぎ巾・衿附及び衽附の方に四裾の
高さと燧布の丈の標をつける。

八、衿 裏衿二枚を中表におき、その上に衿先布を重ねて接ぎ代を標し、更

にその上に上着下着の表衿をのせて、衿丈を標し、表衿を除いて裏衿を
出し、衿丈標より十五厘衿先裏衿接ぎの標より四厘位下)計つて標をつ
け、衿の附け分けの標とする。尙外に合標をつける。

● 縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、裾廻りの縫ひ合せ、四、裾合せ、五、衿附、六、袖附、
七、共衿。

一、袖 裏袖に袖口布をかけ、上着及び下着の袖口を縫ひ、袖口に綿を含め
て留をし、袖口布の丈までそれぞれ四つ縫をする。次に表袖と裏袖と
を合せ、袖口下より袖下を縫ひ、次いで八つ口布及び八つ口被の袖下をも縫
ひ、八つ口を合せて縫ひ、綿を少し含めて八つ口布の奥及び袖口布の奥
を、それぞれ合せて縫ひ、裏袖及び袖口かけの縫ひ目にとぢつける。

注意 袖口布奥合せの時、上着袖口布の山を少し擒んで腰を取り、丈標を合

せる。

二、身頃 上着表身頃の背及び脇縫・衽附・衿附まで普通綿入の表のやうに縫ふ。胴裏と下着裾廻しとの胴接ぎの標を合せて縫ひ、折りをつけ、隠し縫はかけぬ背及び脇縫・衽附・衿附をする。

三、裾廻りの縫ひ合せ 上着裾廻し及び下着表裾の背脇を縫ひ、前裾の上部に燧をつける。この時燧布の斜の處をのばさぬやうに、又横布にならぬやうに注意する。折りは燧布につけ、隠し縫をし、次いで下着表裾及び上着裾廻しにそれぞれ衽を附ける。

四、裾合せ 上着表と上着裾廻し、下着表裾と下着裾廻しとをそれぞれ裾合せをし、棗を揚げ、裾に綿を入れ、假とぢをして衿下を縫ひ、背及び脇の縫ひ目をとぢる。次に上着裾廻しと下着表裾の上部を燧布の端から他方の端まで縫ひ合せ、胴接ぎの縫ひ目にとぢつけて、表より隠し縫をする。下着表裾の衽と上着衽裾とを縫ひ合せ、下着裏衽附にとぢつけ

る。

注意 地質の重いものは胴接ぎを四枚一緒にする方法を用ひ、折りには表から縫ひ縫をかける。

五、衿附 下着の表衿と裏衿とで下着衽を挟んで衿の附け分けの標まで縫ひ、上着の裏衿を附け分けの標までつける。それよりこの三枚の衿を重ねて、重なりの順序に針を通して、しつかりと附け分けを留め、次に上着裏衿・下着表衿・下着裏衿の三枚で裏身頃を挟んで衿附をし、折りをつけ、表衿附の縫ひ目にこの三枚の衿附の縫ひ目をとぢつける。

注意 一、地厚のもので衿の縫ひ代の高くなるものは、下着裏衿は裏身頃にあて、下着表衿と上着裏衿は中表にとぢ合せて三枚一度につける。
この二枚の衿の縫ひ代は身頃の中に入るやうになる。この時は衿肩廻しの處は縫ひ代が深くなると工合が悪いから注意する。
二、上着の衿巾は衿肩で八耗位つめると着用して工合がよい。

それぞれ衿先を整へ、衿巾に折つて三つ衿を入れ、絹け上げる。但し衿縮は袖附終へてからする。

六、袖附 身八つ口を縫つて綿を含め、袖附を女物衿のやうにし、上着の八つ口布と下着の八つ口布の袖附より上の部分は裏袖附にとぢつける。

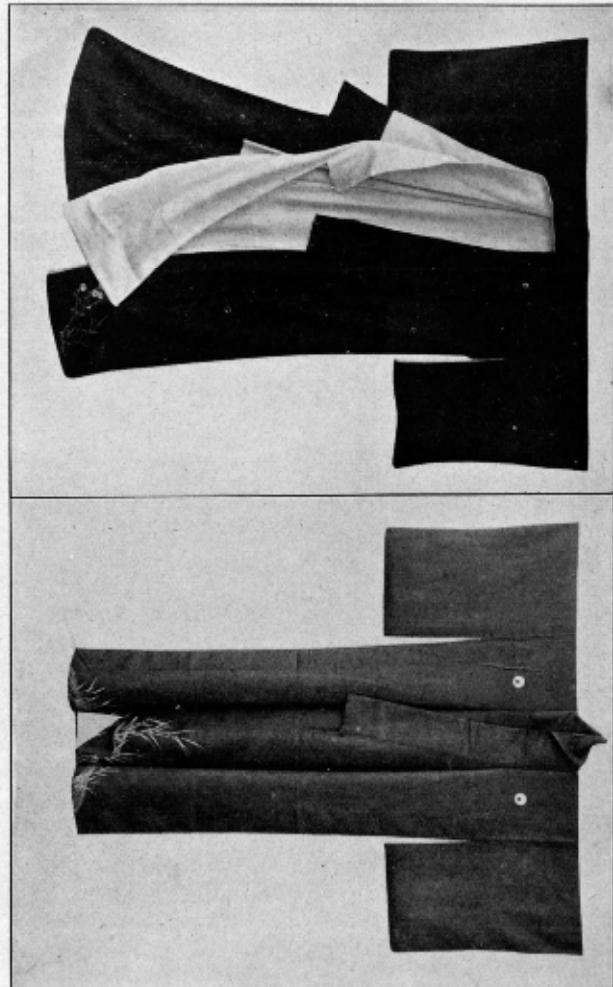
七、共衿 各部とぢ残しのないやうに全部とぢ合せたならば、共衿を普通にかける。

附比翼

下着の廻りを別々に縫ひ、これを仕立て上つた上着に絹け附けたものであつて、本比翼のやうに見せる。燧布はいらない。

縫ひ方

上着を普通の小袖に仕立て、次に下着の袖及び身頃の各部即ち袖口・八つ口・裾廻りの上・衽衿附等の裏を四耗ふかせて縫ひ、その山を下着の各部の縫ひ目に合せて絹けつける。衿丈も片方で六耗位つめて縫ひ、衿肩廻



しの處で上着を弛めにし、衿先を捕へて附ける。

備考

一、衿の附け分けの標とは何か、

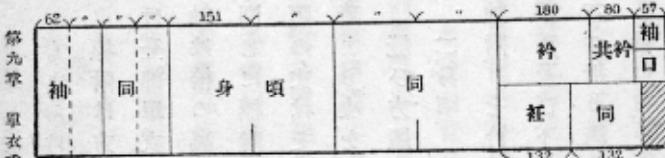
第九章 單衣重ね

單衣重ねは禮装に使ふもので、本重ね半重ね・八掛附き本重ね等の種類がある。本重ねとは上着に裾模様物を用ひ、下着には白一枚分を重ねて縫ひ合せたものをいひ、半重ねとは本重ねと同じやうにみせて、周囲にのみ下着を附け、胴は上着一枚にして仕立てたものである。八掛附き本重ねとは、本重ねの上着にも下着にも八掛を附けたもので、正式には上着・下着及び八掛共同じ裾模様を附けるのであるが、上着にのみ裾模様をつけることもある。

本来、衿重ね、締入重ねのやうに普通單衣仕立ての物を二枚重ねて、その縫ひ目即ち、背脇・衽をとぢて着るものであるけれども現今は、着用の便宜上仕立方を工夫して、二枚縫ひ合せて仕立てるやうになつた物であるから、その地質色合等によつては別々に仕立てて、着る時とちつけることもあ

本重ね上着の裁ち方

用布並巾 11米73幅



積り方

公式

$$(總用布 - 袖丈 \times 4 + 裁ち切り衽下り \times 2 - 袖口布) \div 6 = \text{身丈}$$

$$(1170 - 62 \times 4 + 21 \times 2 - 58) \div 6 = 151$$

る。地質は、上着には紺・紺縮・縮縮・羽二重麻等を用ひ、下着には白、又は

薄色の紺・紺縮・縮縮・麻等を用ふ。

第一 單衣本重ね

● 普通仕立上げ寸法

上着寸法は普通單衣の通りにし、下着の巾のつめ方は普通衿の裏のつめ方位に、丈は地質の伸縮に注意することが大切である。

● 裁ち方と積り方

上着の裁ち方は、普通女物單衣に同じ。但し袖口布を要す。下着の裁ち方は上着に同じ。但し衿裏を

取ることもあるけれども、それは用布の丈の長い物に限る。

三 標附け方

上着は全部單衣物に同じ。

下着の袖は衿の裏袖の標附と同様に八つ口の方で、袖丈を三耗つめ、他は表袖と同じに標附をする。

下着身頃の丈はその地質によつて加減をする。丈が狭いの前後

衿は上着より丈を二耗つめる。

四 縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、衿下及び裾締、四、下着の身頃、五、とぢ及び八つ口縫、六、袖附、七、衿附、八、共衿。

一、袖 上着及び下着の袖口布の下を二つ折にして押へ縫をし、物によつては三つ折り締とし上着袖に袖口布を合せて袖口を縫ひ、留をして袖口下を袖口布の丈まで四つ縫ひにし、下着袖に袖口布をかけて留をし、

上着のやうに袖口下を縫ひ、縫ひ代を斜に表に折つて自然に上着の縫ひ代と合せて、袖口下から袖下の中途まで四つ縫にし、それより先は別別に縫つておく。袖口布の奥を袖に縫けつけ、丸みを作り、八つ口を合せて、縫ひ代いっぱいに奥を縫ひ、折りを標通りつけて表返す。

二、身頃 上着の背及び脇縫をし、衽を附けて折りを普通につけ、脇の縫ひ代を割つておく。

三、衿下及び裾締 上着の衿下及び裾締けをする。裾の角は絹布單衣のやうに額縫を作る。下着の衿下を縫け、裾は縫ひ込みになる分を除いて、他は全部縫けておく。

四、下着の身頃 袖の裏のやうに縫ひ代を中心に入れるやうに布を合せて、背縫及び脇縫をし、衽を附けて折りをつけ、脇の縫ひ代を割つておく。

五、縫とぢ及び八つ口 背脇の縫とぢをし、八つ口を縫ひ、裾の處で縫ひ代の仕末をする。

六、袖附 袖附の留を衿のやうにして、上着下着の袖を附け、折りを上着は袖に、下着は身頃につけて次に衽をとぢる。

七、衿附 まづ初めに下着の表衿と裏衿の衿先を合せて衿丈の標より五耗先の處を縫ひ、引返して衿先にきせをかけ、次に上着の裏衿を下着の表衿に合せ、三枚假にとぢつけて、上着の表衿を上着の表衽に、下着の裏衿を下着の裏衽にあて、衿を四枚一緒に縫ひ附け、衿の中をよく仕立て三つ衿を入れ上着下着とも衿巾を定めて絞け上げる。

八、共衿 上着は普通に、下着は衿附の縫ひ目から五耗離して共衿をかけ、上着の衿巾は肩の邊で四耗位控へる方が着て工合がよい。次いで衿糸をつける。

縫ひ方別法(縫ひ方順序)

一、袖 上着及び下着の袖口布の下を二つ折にして押へ縫をし、上着の袖に袖口布を合せて縫ひ、袖口下に四つ留をして、袖口布の丈まで四つ縫

をして、袖口布の奥を袖に絞け附ける。下着の袖に袖口布をかけ、四つ手縫にすることは上着に同じ。袖口布の奥を袖に絞けつけることも上着本に同じ。上着・下着とも袖下を袋縫にして袖口下の處のみ四つ縫にし、

衿の袖裏のやうにする。丸みを作つて引返し、八つ口を別々に絞ける。

二、身頃 上着の背及び脇縫をして衽を附け、折りを普通につけて脇の縫ひ代を割る。

三、衿下及び裾縮 上着の衿下を絞け、裾縮も普通にし、下着の衿下を絞け、裾は縫ひ込みになる部分を除いて全部絞ける。

四、下着の身頃 下着の背及び脇縫をし、衽を附けて、折りをつけ、脇の縫ひ代を割つておく。

五、縫とぢ及び八つ口 背脇及び衽の下の方をとぢ、八つ口を縫ひ、裾の方の始末をする。

六、袖附 衿の袖附のやうに留をして、上着の袖附及び下着の袖附をし、上

下着は袖の方へ、下着は身頃の方へ折りをつける。

七、衿附 上着の衿と裏衿とて、上着の身頃を挟んで衿をつける。次いで下着も同様に衿をつけ、衿先を縫ひ、上着と下着の衿附をとぢる。それよりそれぞれ衿巾を定めて絶け上げることは、前の方に同じ。

八、共衿 共衿のかけ方、前の方法に同じ。

第二 単衣半重ね

● 普通仕立上げ寸法

普通仕立上げ寸法及び地質等は本重ねに同じ。

● 裁ち方と積り方

上着の裁ち方は、普通の本裁の通りにする。但し袖口布の要ることは本重ねの通りである。
半重ねの下着は名の如く、下半身並びに袖衿を普通につけるものであるから、その身頃は腰の處まで、即ち九十粋位の丈とし、布が充分ある時でも

その高さは今少し多くする位にして、常に腰紐を締めた處に絶けつけるやうに注意して裁つ。

● 標附け方

重ねを略した部分を除く外何れも本重ねに準ず。

● 縫ひ方順序

- 一、袖、二、身頃、三、衿下及び裾絶び
- 四、衿附、五、袖附、六、下着の衿下及び裾絶び
- 七、下着身頃、八、とぢ方、九、下着衿附及び絶け方、十、共衿、一、袖
- 袖の縫ひ方は本重ねに同じ。
- 二、身頃 上着の背及び脇縫をし、衽

半重ね下着の裁ち方

用布並巾 10米 56幅

						180		
						衿	共衿	上着裏衿
袖	同	裾	同	同	同	袖	口	下着裏衿
62	"	95	"	"	"	95	56	

積り方

公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{裾丈} \times 4 + \text{衽} \times 2 + \text{袖口布} + \text{衿丈} = \text{総用布}$$

$$62 \times 4 + 95 \times 4 + 95 \times 2 + 58 + 180 = 1055$$

をつけ、折りをつけて、脇の縫ひ代を割つておく。上着の背縫及び脇縫は、切

三、衿下及び裾締 上着の衿下及び裾締等全部普通単衣の通りにする。

四、衿附 上着の衿附をいつもの通りにする。

五、袖附 袖附の留をして上着の袖を縫ひつけ、折りをつける。六、下着の袖

附の標通り折つて上着の袖附の縫ひ目に縫けつける。大手前の中止前後、

六、下着衿下及び裾締 下着の衿下及び裾締を普通本重ねのやうにする。

七、下着身頃 下着の背縫及び脇縫をし、衽をつけて圓のやうなものをつ

くる。

八、とち方 下着の継ぎ代を折つて縫をかけ、調子をよく整へて縫けつけ
る。上着の布が弱いか、又は下着が重くて垂れるものの場合には、継ぎ
代は二つ折りにして、その上を耳継ぎのやうにして縫けつける。

九、下着の衿附及び締け方 下着の衿及び衿裏で衽を狭んで衿をつけ、そ
の上は衿ばかりであるから、そのまま衿を二枚合せて縫ひ、衿先を作つ

九

てこれを上着の衿の廻りにとぢつける。衿の中を整へて三つ衿を入れ、

衿巾を定めて締け上げる。

十、共衿 共衿の掛け方は本重ねに同じ。

十

共衿の掛け方は本重ねに同じ。

第十章 梓半コート

梓半コートの地質としては、毛織物にはセル・カシミヤ・薄地ラシヤ・絹布には御召絲織縮緬・錦紗・羽二重大島等が用ひられ、又ビロードも用ひられる。裏地には羽二重・甲斐絹・八つ橋などが用ひられる。

一 普通仕立上げ寸法

袖丈	着物と同寸	身丈	着丈より二〇糸位短かく
袖口	着物と同寸	羽織より一〇糸長く	
袖附	一糸増し	普通一米一〇糸内外	
袖巾	四耗廣く	身八つ口	一〇糸
後巾	着物と同寸	小衿巾	二糸
前巾	いつばい <small>但し脇縫は裾へ一糸廣げる</small>	縁越し	一糸以上
肩巾	着物と同寸	着物より四耗増し	

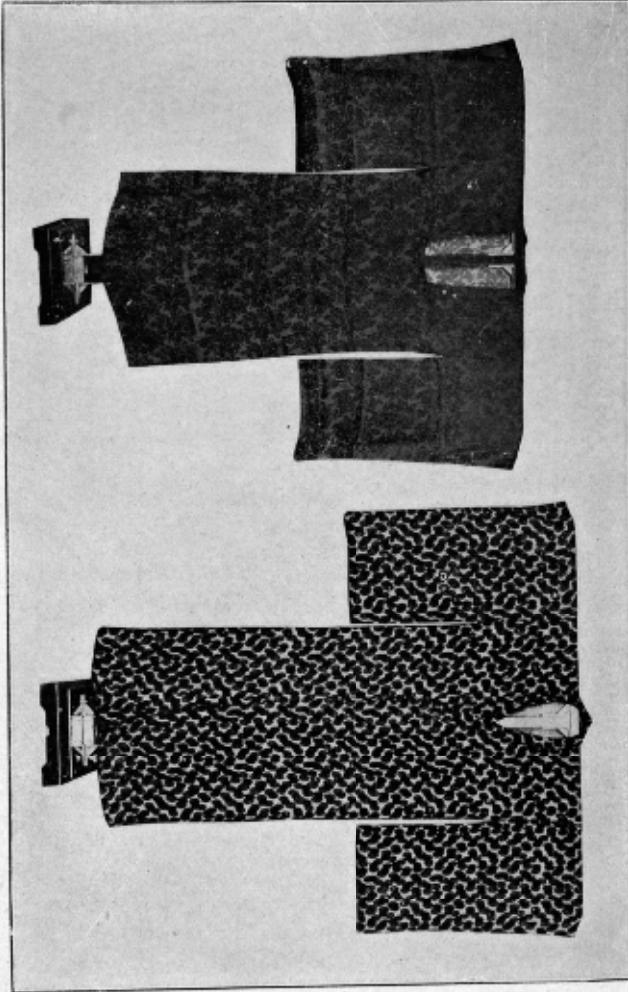
二 裁ち方と積り方

表の裁ち方は大體羽織に同じく、羽織の衿が堅衿に代つたと見てよい。しかし羽織と違つて襷が要らないから、前身頃から落した物は小衿・袖口・ボケツト口切れ等とし、残りは地薄の物は飾り紐にする。

布の折り方は袖・堅衿と折り、次に残りを前後の差をつけて更に二つに折る。

胸裏の總用布はボケツト布が要るから、羽織より三十糸内外長く要るのが普通である。ボケツトは見えぬものであり、且つ丈夫な布がよいから胸裏と別のものでもよい。

注意 コートの胸接ぎの高さは前後揃ふのがよい。しかし仕立直しの場



本裁女半ヨートの裁ち方

用布並巾 10米48厘							
袖	同	縦衿	同	後	前	前	後
						二 小衿 袖 口 切	紐
						106 60	20

積り方

公式

$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + \text{縦衿丈} \times 2 + \text{後身丈} \times 4 + \text{前後の差} \times 2 &= \text{総用布} \\ [\text{総用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{前後の差} \times 2 + \text{縦衿丈} \times 2)] \div 4 &= \text{後丈} \\ \text{後身丈} + \text{前後の差} &= \text{前丈} \\ \text{出来上り身丈} - \text{縦衿下り} + \text{前下り} + \text{上下の縫ひ代} + \text{縫越} \\ &\quad \text{し} + \text{三つ衿縫ひ代} = \text{縦衿丈} \\ (\text{衿肩明} + \text{縦衿下り} + \text{縦衿巾} + \text{縫ひ代}) \times 2 &= \text{小衿丈} \end{aligned}$$

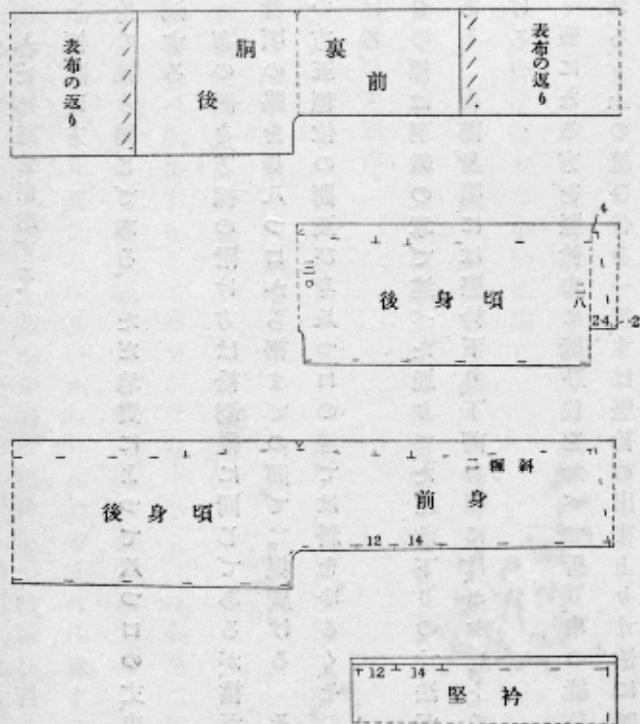
半ヨート裏の裁ち方

用布並巾 5米56厘				
袖	同	胴裏	同	ポケット
				紐

$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + \text{胴裏丈} \times 4 + \text{ポケット丈} &= \text{総用布} \\ \text{出来上り身丈} \times 2 - \text{裁ち切り後丈} - \text{接ぎ代} &= \text{胴裏丈} \end{aligned}$$

標 附 け 方 図

第十章 給手コード



合には適宜斟酌する。

● 標附け方

一、袖 補の袖と同じである。ただ地質によつて八つ口の丈、巾のつめ方を加減する。

二、身頃 布の置き方、標の附け方は補羽織に同じであるが、檔がつかぬ代り、前身頃の脇を身八つ口から裾までの間で二極廣げる。そのまげ方は裾の方五極位の間及び身八つ口の邊では斜をゆるく、その中間で多くまげる。

前下りの標は羽織の章で述べた通りで、ただ前下りの寸法が遠ふばかりである。尙前身頃には堅衿下り、下前身頃には、ポケツトの位置の標をつける。

三、堅衿 表になる方を堅衿巾に縫ひ代を加へて折り、巾の縫ひ込みは裏に入れる。上の縫ひ代を一極丈は堅衿の出来上り寸法に四耗を見返

し及びきせの分として加へたもの、巾は出来上りいっぱいとし、下前にはボケツト口明の位置及び寸法等の標をつける。

四、小衿 小衿は合羽の小衿に同じ。

五、ボケツト 合羽に同じ。但し地厚の物のボケツト口切れは巾丈とも一極位差をつける方が出來上つて落着きがよい。

● 縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、堅衿附及びボケツト、四、背及び脇とぢ、五、袖附、六、堅衿術、七、小衿附、八、紐附

一、袖 本裁女物補に同じ。

二、身頃 前後の胴接ぎをして継をかけ、前下りを縫ひ、表を二耗裏の方に返す。背脇を細かく縫ひ、縫ひ目を割る。糸がつれてゐると縫ひ目が縮んで見苦しく、又ほころび易いからつれぬやうに注意する。

三、堅衿附及びボケツト附 上前の身頃に堅衿をつけ、縫ひ目を割る。下

前の身頃と堅衿とを合せ、ポケット口を明けて縫ひ、縫ひ目を割つて口明で前身頃とポケット布、堅衿とポケット布とを、それぞれ合せて縫ひ、口明に留をし、ポケットの底を縫つて縫ひ目をとぢつける。

四、背及び脇とぢ 背及び脇とぢをして身八つ口を縫ひ、裏の方に折りをつけ、表から縫をかける。

五、袖附 袖のやうに表裏の袖をつけ、縫ひ目を割る。

六、堅衿締 堅衿の下を縫つて、芯を入れ、堅衿巾を身頃の縫ひ代にとぢつけ、裏身頃をその上に細かく縫けつける。

七、小衿附 普通は角を額縁に作つてつけ、小衿附の縫ひ目を割り、落ち着きの工合が悪るければ、角に切り込みを入れて正しく整へ、裏堅衿上部及び裏身頃を縫けつける。

八、紐附 まづ仕上げをし、巾一粋五耗、丈三十粋位の紐を二本縫け、下前堅衿の中央の方に、縫ひ目を下向きにして一本つけ、他の一本は上前

裏脇縫の處につける。

飾り紐は、共色の打紐、又は表地の殘布を細く撚糸にし、好みによつて結び、合羽のやうにつける。

表地が地薄で、しかも上等のものは共布の撚糸紐をつけるのが上品である。

参考

一、並巾十米六十八粋で桜半コート表の裁ち方をせよ。正道し袖丈は

出来上り六十五粋とし、他は普通とす。

二、半コート後身頃及び前身頃の襟附方を問ふ。

三、半コートの襟を廣げる理由と、その襟附方について注意すべきことを述べよ。

第十一章 夜具類

第一 夜着

普通仕立上げ寸法

袖丈	六二纏	衿下	七五纏
袖巾	三二纏	衿巾	一二纏
袖附	總附にする	衿肩明	一〇纏五耗
表身丈	一米五〇纏	纏	一五纏
前巾	三二纏	裾	三〇纏四〇纏
後巾	二八纏	袴	二〇纏
衽巾	一七纏	袴	一〇纏
衽下り	二二纏	紹の分量	二貫目内外
		真綿	少し

裁ち方と積り方

表の裁ち方は、本裁長着と同様にし、尙表布で燃布をとる。又片面物は棒衽裁とし、用布の丈の短い物は鈎衽裁にする。燃布は都合で衿又は衽の端で取つてもよい。

裏の裁ち方は表に準じ袴の寸法に應じて、身丈・衽丈・衿丈等の寸法を増して裁ち、袖は袖袴の分として奥袖を取り、半巾にして用ふ。肩當布は、並巾一米四十纏位を要し、丈を二つに折り、巾を三等分して三分の一を前に三分二を後とし、衿肩明を九纏、前の方は八纏とし、一纏の斜をつけて裁ち落す。尙衿肩には一纏の切り込みを入れておく。

標附け方

一、袖及び燃 燃布に寸法通り標をつける。

表袖には、丈巾の標をつけ、袖下に附の方から燃の寸法を標つけ、裏袖には、巾を標して、丈は袴の表に出る部分の巾だけ表袖より四耗つめて標

標附け方圖



肩當の裁ち方



夜着表の裁ち方

用布並巾 一反

袖	同	身頃	同	衿	縫
		二五	二五	二五	二五

積り方

公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{縫} + \text{衿丈} = \text{総用布}$$

$$\{\text{総用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{縫})\} \div 4 = \text{身丈}$$

夜着裏の裁ち方

用布並巾 15米 63幅

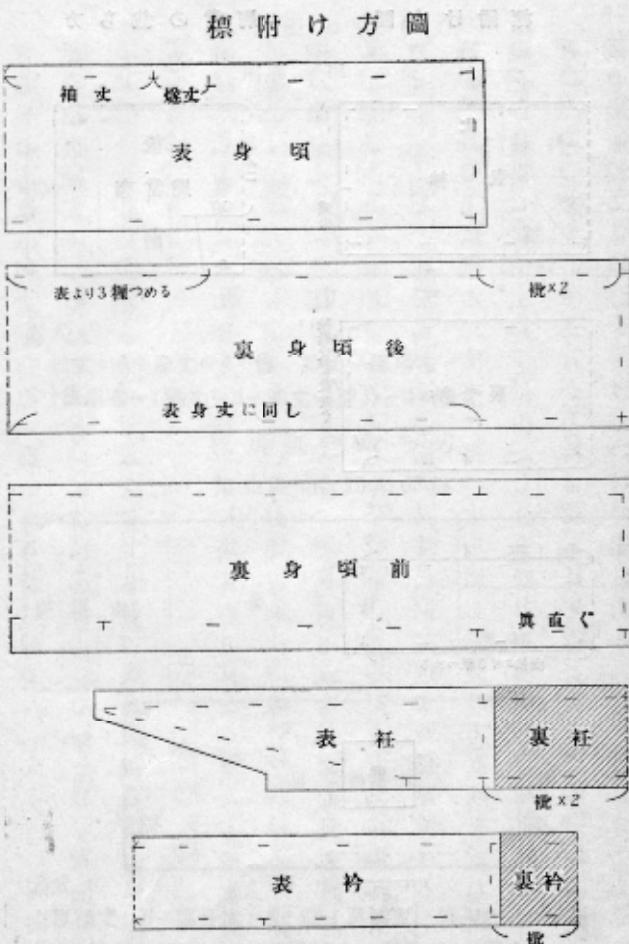
裏袖	同	裏身頃	裏衿
		二五	二五

奥袖	同	裏身頃	縫
		二五	二五

公式

$$\text{裏袖丈} \times 6 + \text{裏身丈} \times 4 + \text{縫} + \text{裏衿丈} = \text{総用布}$$

$$\{\text{総用布} - (\text{裏袖丈} \times 6 + \text{裏衿丈} + \text{縫})\} \div 4 = \text{裏身丈}$$



をし、奥の方は三纏丈をつめて、祇山から斜に標す。

奥袖は、裏袖丈のつめた寸法と同寸法に丈を標し、巾標をして表袖のやうに、袖下の附の方から燧の寸法を標し、裏袖の奥と奥袖の端とに、山及び合標をつける。

二、身頃 表身頃には、丈標をつけ、袖丈に燧丈の寸法を加へたものを、袖附の標としてつけ、次に背縫・肩巾・後巾・衽下り・前巾等の標をつける。裏身頃は、表身丈と同寸法に丈の假標をして、袂の寸法を標をし、奥袖丈に燧の寸法を加へて袖附をつけ、それから背・肩・巾・後・巾・衽下り・前・巾の標をつける。但し袂の部分には表身頃の後巾と同じに巾の標をつける。

三、衽 裏衽の上に袂の二倍だけ裾の方を出して裏の方表衽を重ね、表裏の裾の縫ひ代・祇山丈・衿下(祇山から計る)衽巾等の標をし、衽丈標まで一緒に衽附の標をして、それから衿下標と衽先標との中程で一纏ばかり張り出し、程よく格好をつけて衿附の標をする。

四、衿裏衿を二つに折り、衿丈をつけ、餘りを折り返して山を揃へ、表衿をその上にのせ、山衿肩明杠下り粋を標をして巾標仕立上り巾より一粋廣くをしておく。

三、縫ひ方順序 一、袖、二、身頃、三、衿附、四、袖附、五、綿入、六、肩當及び掛衿

一、袖 表裏の袖口を縫ひ附せ、表袖の方へ折り、外袖の袖下に燧を縫の布目を合せて縫ひ附け、袖の方へ折る。奥袖も同様にして燧をつけ、燧の角を留め引續き表裏の袖下を縫ひ、内袖の方へ折りつける。縫ひ目には全部隠し縫をかける。

二、身頃 表裏の背裏は背を衿肩明から十二粋縫ひ、その下を丈の三分の二ばかり縫ひ残す。脇枉を縫ひ、若物のやうに折り、表裏の裾合せをして表の方へ折り、衿下を縫つて表の方へ折る。

三、衿附 表裏の衿丈標を合せて縫ひ、表の方へ折り、左右とも衿の粂山を

衿下の標に合せて衿をつけ、裏衿の巾は標より一粋控へて縫ひ合せる。衿先の處は、自然に格好をつけて斜に縫ひ裏の方へ折る。

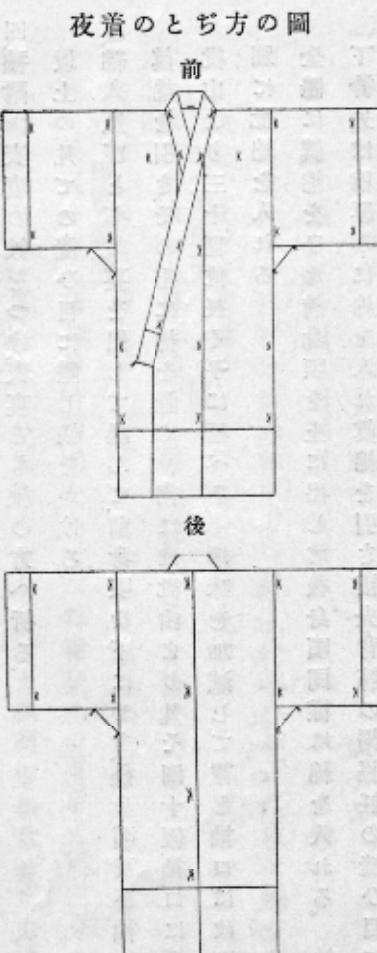
四、袖附 表裏の袖をつけ、表裏とも袖の方へ折る。

以上の一凡ての縫ひ目に隠し縫をかける。

五、綿入及びとち 裏を出して疊んで、前身頃を下におき、後身頃及び袖に真綿を引き、その上に綿を置く。裾には粂山より凡そ四十粋、袖口には、粂山より三十粋位長く平に延べる。厚味を加減して裾と袖口には別に粂綿を入れる。

全體に真綿をひき、前身頃を上に出して後身頃同様に綿を入れる。衿下衿先は稍厚みに綿を入れ、真綿を引き、接先背筋の裾脇枉の縫ひ目にそれぞれ引糸をつけて背の縫ひ残した處から引返して綿をよく含ませ、後に合標を合せて裏袖と奥袖との縫ひ残しを絶つけて、どぢ糸を六つける。

六、肩當及び掛衿 肩當布の兩端を伏せ縫ひにして前後を折り、綾をかけて新けつけて後に、掛衿の兩端を伏せ縫ひにして、共衿をかけるやうにしてつける。



第二蒲團

● 種類丈・綿の分量

蒲團の種類

敷蒲團（三布蒲團）表 同じ布

掛蒲團 表四布
裏五布 六布

四布蒲團 表四布
裏五布 六布

五布蒲團 表五布
裏五布 同丈

丈と綿の分量

丈 一米八〇纏
綿 一貫五〇〇匁

丈 一米九〇纏以上
綿 一貫五〇〇匁

丈 一米九〇纏以上
綿 二貫匁

外に各々真綿少し

● 裁ち方と積り方

用布

積り方

裁ち方

三布蒲團一反

丈の六倍

全體を三等分す

四布蒲團表七米二〇纏
(普通は一反)

丈丈の四倍

表を四等分

四布蒲團裏一〇一ニ米

裏丈の五—六倍

裏を五—六等分す

五布蒲團 表一反
裏一反

丈の五倍
丈の五倍

表裏共全體を五等
分す

三 縫ひ方順序

一、三布蒲團 三布蒲團は表裏共同じ布で作るもので、表裏の布の續いたまま巾を縫ひ合せ、裏になる處の中央を約一米二・三十粁程縫ひ残して置き、綿を入れて引返す處にする。縫ひ目に折りをつけ、隠し縫をかける。次に三方を縫ひ、表に折りをつけ、隠し縫をかける。敷蒲團は綿が厚いから、四隅の縫ひ目を合せて四粁位縫つて置くこともある。

綿入れ 裏を出して廣げ、縫ひ残して置いた方を下にしておき、まづ真綿を引き、綿は布より二十粁位出して縦横適當に入れ、綿の縫ぎ目に注意して重ね、隅の綿を切りとり、周囲の綿を布より少し長く折り返し、その上に又綿を一二枚のせて眞綿をひき、四隅及び巾二個所、丈三個所に引糸を附け、新聞紙二枚を中心になべ、四隅を中心へ折り曲げて、縫ひ残

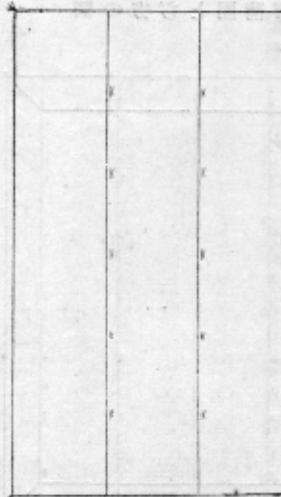
した處から引返して紙を取り去り、丈及び巾をよく引き合せて、あとを締けてとぢをする、とぢは三十粁おき位に三粁の針目です。

輪の方を上にして適宜に枕標をつける。

二、四布蒲團 四布蒲團は鏡蒲團ともいふ。上下左右の枕の寸法を同じにするものであるから裏布は上下とも、枕の二倍づゝ長く要り、巾は枕の四倍だけ表布より廣く要る、その枕の寸法によつて裏を五布か、六布かにする。

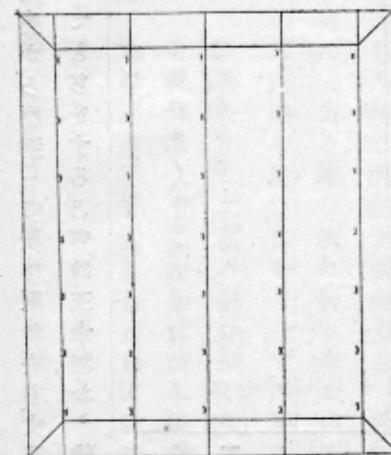
表を全部接ぎ合せて折りをつけ、隠し縫をする。裏は中央を一米程縫ひ残し、他は全部接ぎ合せて折りをつけ、隠し縫をかける。但し中央の接ぎ目の折りは表とつづくやうにする。

三布蒲團のとぢ方の圖



表裏の周囲を縫ひ合せ、裏布で額縁を作つて隠し縫をかけ、裏返して表布の方に綿を入れる。綿は角の處をよく整へ、綿を入れ終つたならば四隅に引糸をつけ、中央に紙を當て、四角を中心曲げて、先に縫ひ残しておいた所から引返して絶け、とぢをすること等三布蒲團に同じ。

四布蒲團とも方の圖



三、五布蒲團 表裏ともそれぞれ縫ひ合せ、次に周囲を縫ひ、綿を入れ、圖のやうにとぢをする。四隅は角のまゝ飾り糸をつける。

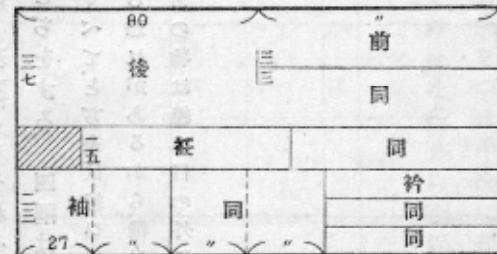
注意

すべて、とぢ糸は縫ひ目の折りの上にかかるやうにする。布の損ずる恐れがあるから、縫ひ目の上以外は、なるべくとぢないでおくが、平常の物は縫ひ目の外にその間をとぢてもよい。

第十二章 大巾中巾物各種裁ち方

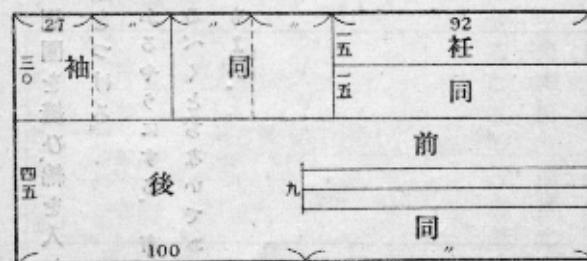
小裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ1米60幅



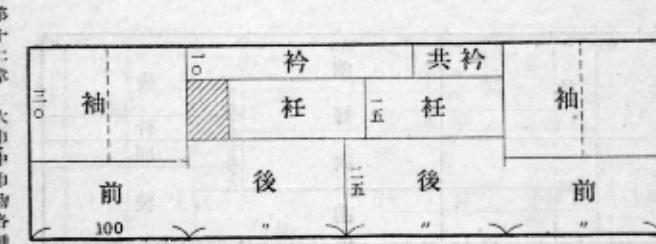
小裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ2米



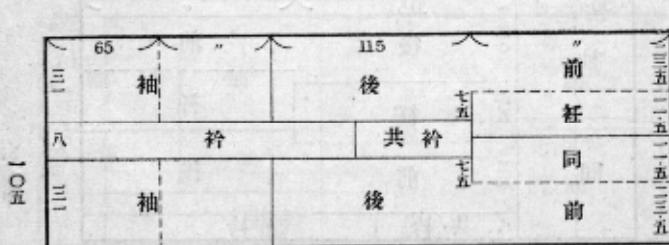
小裁長着の裁ち方

用布中巾(50幅) 長さ4米



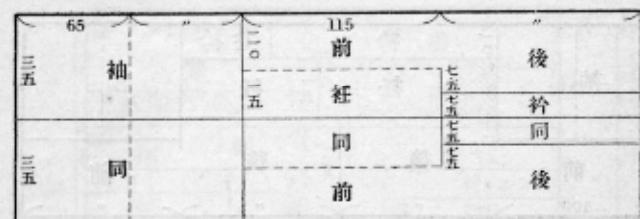
中裁長着の裁ち方

用布大巾(70幅) 長さ3米40幅



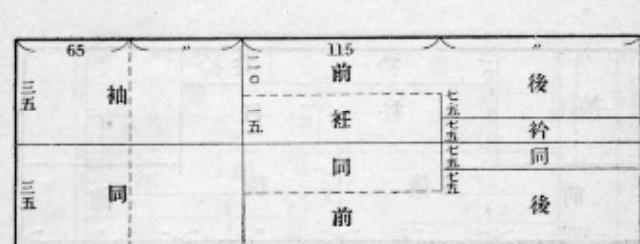
中裁羽織の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ3米22幅



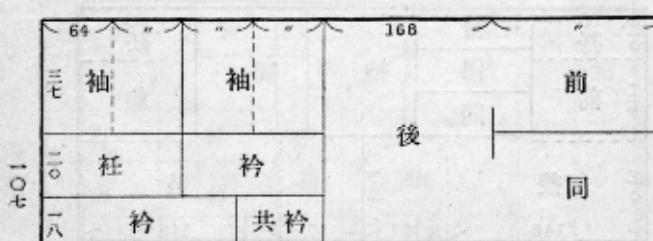
中裁長着の裁ち方

用布大巾(70幅) 長さ3米40幅



本裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ5米52幅



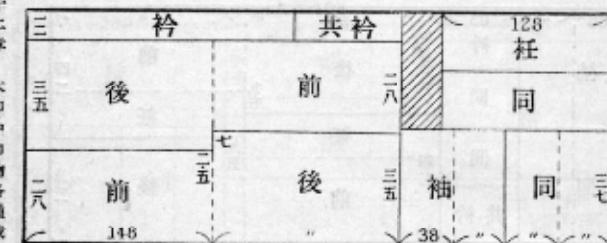
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ4米24幅



本裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ4米48幅



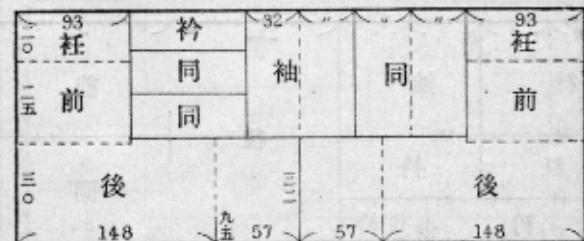
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ4米90幅



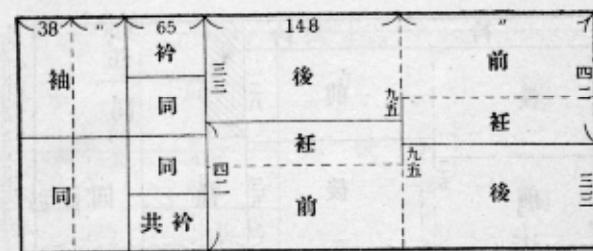
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ4米10幅



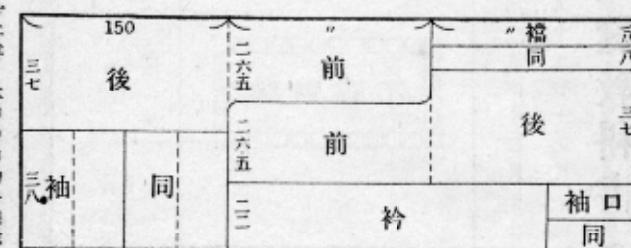
本裁羽織の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ4米50幅



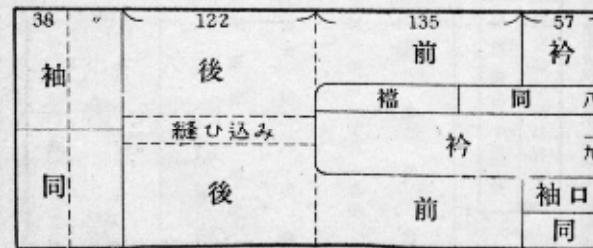
本裁羽織の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ4米50幅



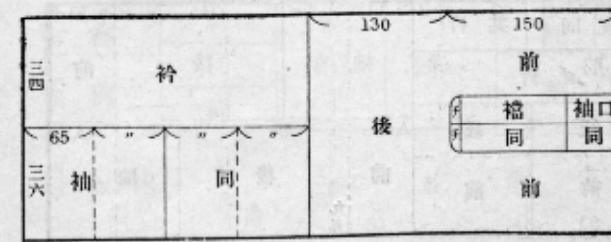
本裁羽織の裁ち方

用布大巾(75幅) 長さ3米90幅



本裁羽織の裁ち方

用布大巾(70幅) 長さ5米40幅



模範裁縫教科書 卷四 終り



大正十五年十二月十四日印刷

模範裁縫教科書卷四
定價金四十三錢

大正十五年十二月十七日發行

著作者 大妻コタ力

印發刷行者兼 東京市麹町區大手町一丁目一番地

合資会社三省堂

□□□□□□□□□□
□□製複許不□□
□□□□□□□□□□

印刷所

東京府荏原郡蒲田町
會社式三省堂印刷部

發行所

(東京市麹町區大手町)

株式會社 三省堂 電話牛込七二六三(振替口座東京三三五)

